

修士論文

聴覚障害生徒の英語教授法に関する一研究

—— 読話による聴解問題の理解をめぐって ——

平成4年度

筑波大学大学院 教育研究科

カウンセリング専攻 リハビリテーションコース 松藤みどり

— 目 次 —

問題の所在

I. 聴覚障害生徒と英語聴解問題	1
II. 聴覚障害生徒の英語学力の特徴	3
III. 英語のリスニング力と他の能力との関係	7
IV. 研究の意義	10

本論

I. 目的	12
II. 方法	12
1. 対象	12
2. 材料	15
3. 手続き	31
III. 結果	35
1. ディクテーション	35
2. ヒアリングテスト	43
3. 最小対語	53
4. クローズテスト	60
IV. 考察	69
1. グループに対する指導の効果	69
2. 個々の生徒に対する指導の効果	71
3. 出題による難易	83
V. 結論	88
文献	91

問題の所在

I. 聴覚障害生徒と英語聴解問題

国際障害者年(1981 年)以降の障害者運動の方向性は「完全参加と平等」であり、それは地域社会、学校、職場のあらゆる場でノーマライゼーションを実現させるためのスローガンとなった(小島, 1990)。

聴覚に障害を持つ児童が聾学校ではなく、地域の小、中学校に入学し、健聴者と共に学習する形態が定着したことは、聾学校に在籍する児童数の減少から明らかである(聴覚障害, 1990)。

1988年に「障害者の雇用の促進等に関する法律」と改正施行された「身体障害者雇用促進法」が1976年に一定割合以上の身障者の雇用を義務づけて以来、聴覚障害者の働く場も広がった。1987年2月に行われた厚生省の実態調査(テクノエイド協会, 1988)によれば、障害の種類別保護率は、視覚障害(5.45%)、内部障害(4.42%)、肢体不自由(4.42%)、聴覚音声言語障害(2.14%)となっており、聴覚音声言語障害者が、他の障害者に比べて経済的に恵まれ、自立していることを示している。

地域社会、学校、職場などに「参加する」ことの実現の可能性の目処がついた今、次に求められるのは、障害者が持てる能力を発揮し、その能力にふさわしい処遇を得ることではなかろうか。

義務教育の場で障害者を受け入れることは一般的になってきたが、入学試験のある、高等学校や大学では障害を理由に受験さえも断られるケースがある。また職場でも昇進のためには検定試験の受験が義務づけられているところがある。公立高校の受験を断られた例(聴覚障害, 1990)

では「英語のヒアリング能力がない」ことが断る理由になった。

職場では、大学院修士課程を終了したコンピュータ技師が、聴解問題が50%を占める社内英語検定に合格することが昇進の条件になっていて困っているケースがあった。この会社では彼の申し立てに対し、特例として英検（文部省認定実用英語技能検定試験）の2級に合格すれば、社内検定に合格したのと同等の扱いにすることを認めてくれた。英検2級の1次試験において聴解問題の占める割合は、全体の20%であるから、聴覚障害者には社内検定より有利であることが推定できる。

吉田(1984)によれば、1982年の時点で高校入試における聴解力テストの実施状況は、全国教育委員会のアンケートで、昭和56年度に28県が実施しており、57年以降まもなく実施予定が2県、検討中が11県となっている。方法としてはテープを用いて各校別々に校内放送を利用し、5～20分のテストを実施している道県が大部分ということである。また大学入試センターによる募集要綱によれば、昭和57年の実績で、22の4年制国立大学、5公立大学、17私立大学が、全学または学部全体、あるいは1学科または1専攻において聴解力テスト（書き取りを含む）を実施しており、昭和58年以降その数には増加の傾向がうかがえるとしている。

最近の状況について、旺文社の平成5年度入試科目&配点一覧から数え上げれば、平成5年度の入学試験において何らかの聴解力テストを実施する予定の4年制大学は国立、公立合わせて51校、私立28校となっており、大学の入学試験において英語の聴解力テストを実施する大学は10年間に2倍近く増えたことになる。

高等学校の英語指導においてはコミュニケーション能力の育成が重視されるようになり、1994年から実施される新しい「高等学校学習指導要領」には外国語の科目として「オーラル・コミュニケーションA・B・

C」の3科目が設けられ、少なくともそのうちの1科目を履修することになった（文部省，1964）。音声による伝達能力(communicative competence)の重要性が叫ばれている今日、高校入試、大学入試に英語の聴解問題が採り入れられる可能性は増大するであろう。

英語の聴解問題で得点できないことが、聴覚障害者の進学や出世をますます阻む要因となる可能性も出てくる。聴覚障害者が英語の試験を受験する際、聴解問題に対して、どのような対処の可能性があるか、探してみる必要が生じてきている。

Ⅱ．聴覚障害生徒の英語学力の特徴

日本における聴覚障害生徒の英語の学力に関して山内(1984)は、公立の複数の聾学校高等部に在籍する生徒と、普通中学に在籍する生徒に同一のテストを実施することによって、聴覚障害生徒の語彙および文法能力について明らかにしようとした。結果として健聴生の正答率を1としたときの聴覚障害生徒の正答率はテストAにおいて0.55（中学1年生レベルの問題で、語彙7項目、文法6項目からなるもの。被験者は健聴の中学2年生76名、聴覚障害生徒は高等部1年生、2年生、3年生計125名）、テストBにおいて0.64（中学2年生レベルの問題で、語彙6項目、文法9項目からなるもの。被験者は健聴の中学3年生、36名、聴覚障害の高等部2年生、高等部3年生、計36名）であったと報告している。

この研究の結果、「聴障生の能力は健聴生にくらべ、やや劣るが聴障生特有の著しい特徴は見出せなかった。このことは、45分間の筆記によるテストだけであったため、特に発音、聞き取りなどを含めた英語力全

体を網羅した調査でなかったことが原因と考えられる。このように健聴生と聴障生の英語力は質的には大差ないという結果になったが、今後の聴障生の適切な指導方法を検討するためにも、聴障生の特性が現れるようなテストにより、質的差異についての解明は重要であると思われる。また今回の研究で国語力と英語力との関係を示唆する結果が得られたが、特に国語力との関係は避けて通ることができない重要な課題であると思われる。」と述べている。

佐野(1984:49-51)は、筑波大学附属聾学校の中学部に在籍する生徒を対象に、5年間にわたって全国標準学力テスト(年1回実施)検査および進研テスト(進学研究会のテスト、中3で年に9回実施)における英語の成績を国語、数学の成績、聴力、読書力、IQと比較してその相関を調べた。その結果:

(1)英語の成績と読書力、IQとの相関は低い。

(2)英語と国語の相関は低い。

(3)読書力テストの中で英語の成績と最も高い相関があったのは読字であり、読解ではなかったとの結論を述べている。

(2)の結論について佐野は彼らの英語学習には、ことばの学習にみられるのとは別の特徴があるのではないかと推察している。

(3)の結論については彼らが英語の学習も、「読字の学習方法、すなわち、努力の成果が容易にあがるものを学習するときの方法でこなしているのではないかと推察し、さらに(学習時間に差をつけることによって生じる成績の差を調べることを目的とした)実験の結果、文中の文脈に含まれる諸関係の把握が必要な問題に対しては、学習時間を長くするだけでは解決しないことがわかったとしている。そして、聾学校の生徒に対して標準学力検査を実施し、その成績をそのまま健聴生徒と比較検討

するケースが多いが、アチーブのレベルだけでなく、どのような得点の仕方をしているかを知ることが、彼らの学習の仕方の一端を知ることにつながるため、教育対象生徒の理解と指導のために必要ではないかと考える。」と述べている。

山内および佐野の研究をふまえて松藤(1991)は筑波大学附属聾学校高等部の生徒で、過去5年間に文部省認定実用英語技能検定試験(以下「英検」と略す)3級を受験した生徒を合格者(51名)と不合格者(121名)に分けてその問題別得点を集計し、得点の傾向を分析した。その結果:

(1)本校生徒にとって弱い分野は、発音、アクセント、ヒアリングである。(合格基準とされる得点率は全体の65%であるが、この3つの分野においては、合格者の平均得点率が50%前後、その他の分野では80%前後であった(図1)。耳から音を受容できない生徒たちに対して、健聴者以上に指導の工夫が必要である。

(2)読解に関する問題は高得点を取りやすく、合格者のみならず、不合格者もかなり高い得点を得ている。

(3)不合格者と合格者の間に得点の開きが大きく、数回挑戦した後に合格した生徒が得点を伸ばした問題は、作文、文法、会話である。合格の決め手となる分野なので力を入れて指導する必要があるということがわかった。

本研究では結論の(1)をふまえて、不得意とされるヒアリングの問題で得点を伸ばす指導の可能性をさぐる。

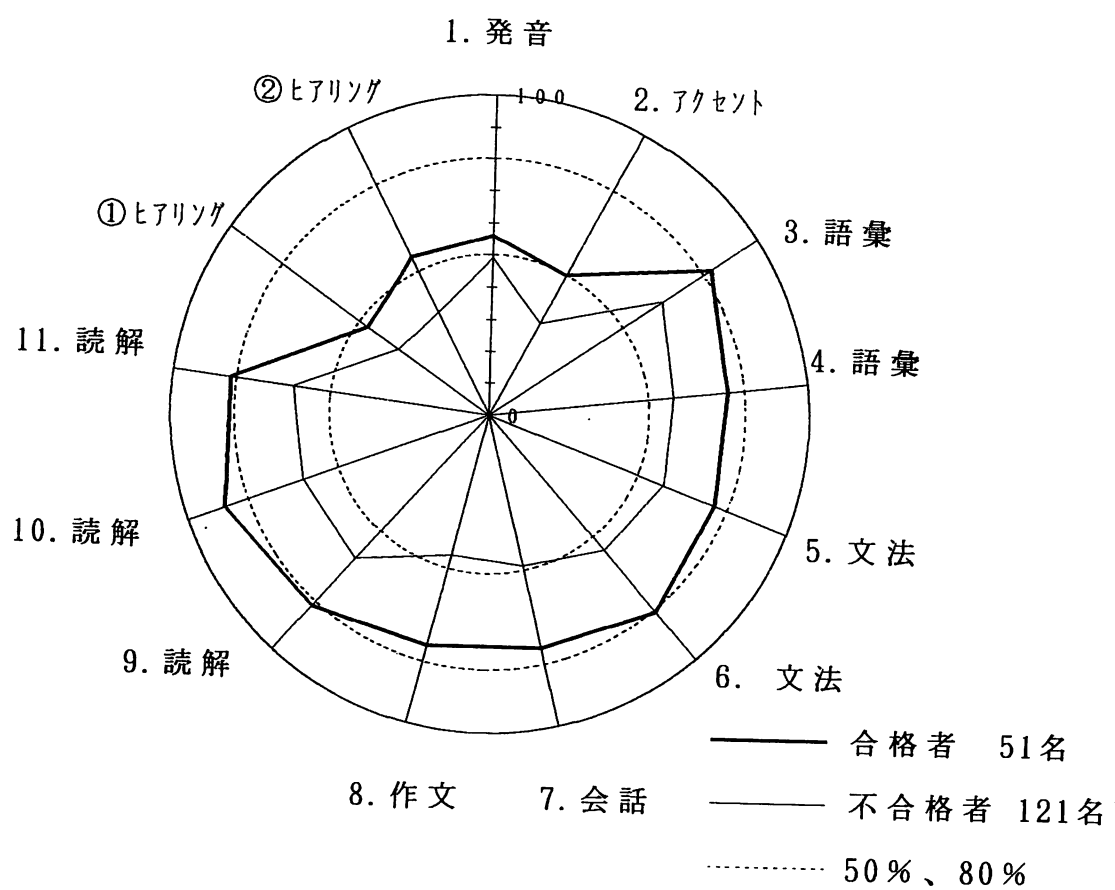


図 1. 英検 3 級 1 次試験における聾学校生徒の問題別得点率 (松藤1991)

なお、本論文で用いる「ヒアリング」と「リスニング」という用語であるが、吉田ら(1984)の考え方に従って、一般に英語の聴解力を示す場合には「リスニング」を用いる。但し引用する文献の中ではこの限りではない。また、英検の聴解の問題は「ヒアリングテスト」とされているので、英検3級、4級で出題される形式の聴解テストには、「ヒアリング」または「ヒアリングテスト」という用語を用いることにする。

Ⅲ. 英語のリスニング力とその他の能力との関係

外国語の測定法には、外国語能力を複数の下位要素(音・語彙・文法、4技能、表出・受容能力など)に分けることができ、それぞれ独立して測ることができるとする部分的測定法と、外国語能力は有機的な統一体であり、その部分を取り出して独立して測ることはできないとする総合的測定法がある(青木 1985)。

Oller ら(1974)はTOEFL(Test of English as a Foreign Language)の下位項目(Listening comprehension, Structure and written expression, Reading comprehension and vocabulary)の成績と、クローズテスト(cloze test)、ディクテーション(dictation)を対比させ、他のどの項目よりもリスニングと相関が高いことを発見した。リスニング対クローズテスト.76、リスニング対ディクテーション.69であった。そしてこの3種のテスト方法には総合的な作業が要求され、学習者の基底の言語能力、すなわち内在化された予測文法(grammar of expectancy)を映し出すという共通性があると主張する。それゆえ、TOEFLの項目の中ではリスニングが英語の全般的能力を最もよく測定す

る手段であると結論している(Ollerら 1974:245-252)。

すなわちTOEFL の試験問題の1/3 を占めるリスニングの問題は、部分的に「聞く」技能のみを測定しているのではなく、総合的能力を測定する役割を果たしているという考え方を示していることになる。

一方、大谷(1976)によればUCLAの外国人留学生対象の英語学力試験で、日本は27か国中20位をしめている。その中で文法力が15位で比較的高かったのに対し、聴解力は20位と低かった。このことは、良く知られているように、日本で教育を受けた日本人の英語力の特徴として、文法力は比較的高く、リスニング力はかなり低い(吉田,1984)ことを示しているといえる。

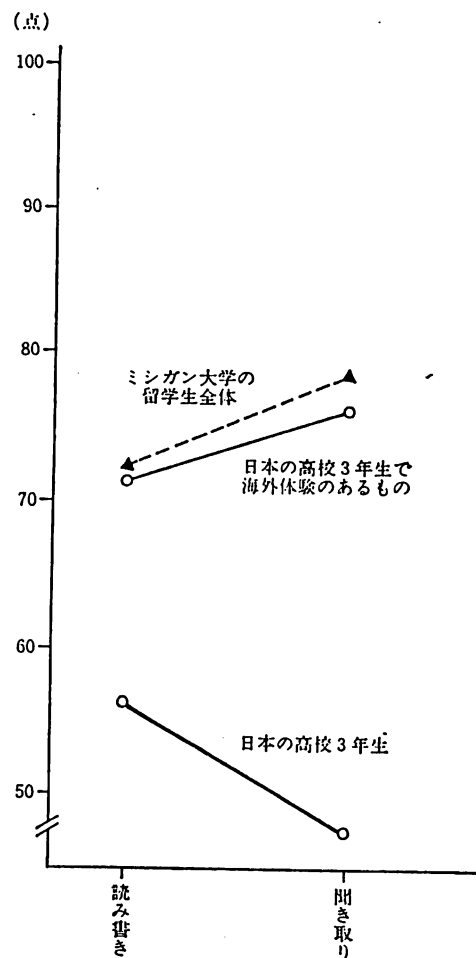


図2. 日本の高校生と各国留学生の英語能力の比較 (アルク 1982)

アルク(1982)は東京、神奈川地区13校の高校3年生、約1,100名を対象に「ミシガンテスト」を実施し、結果の一部をミシガン大学に留学中の留学生の成績と比較した。「日本の高校生の英語能力は各国の留学生に比べて低く、特に聞き取り能力が著しく劣っており、しかも帰国子女とくらべると、英語の個々の能力がバラバラに修得されている。」と結論している(図2)。

竹蓋(1984)はこの結果と、1963年にオハイオ大学のBlackが普通のネイティブ・リスナーと、聴覚に若干の問題のある(=Mild hearing loss)ネイティブ・リスナー、それに同大学大学院に留学中の外国人リスナー、各32名のリスニング能力を比較し、外国人リスナーのリスニングは、聴覚に問題のあるネイティブ・リスナーよりさらに15%劣るとした結果を合わせて、われわれ日本人の英語リスニング力は、聴覚器官に障害のある、英語を母国語とする人達の能力より20%近く劣ると結論せざるを得ないことになる」と述べている。Mild hearing lossとはWHOの分類によれば、平均聴力レベルが26~40dBで、日本では軽度難聴と言われる程度のものである。

またOka(1981)によれば、日本人とベネズエラ人のリスニング力を比較し、後者が機能的な能力を備えているのに対し、日本人はひずめられて、個別的な能力しかもたない、と指摘している。すなわち、言語要素に関する知識の各部分が、リスニングという運用技能として統合的に機能できないのである。そのような日本人の英語力の特徴を考えると、Ollerの主張するリスニング力が全般的熟達度を映し出すという仮説には疑問が出てくる。

またSpolskyら(1968: 79-101)は言語の持つ余剰性(redundancy)に着目して、白色騒音を利用した騒音条件下の聞き取りテストを実施し、

その結果が全般的な熟達度と相関が高いことを実証している。これについて竹蓋(1982)は日本人の聞き取り行動の特徴として、騒音条件場面で極端に聞き取りの力が落ちるのが特徴であるとしている。

これらの研究から日本人以外の外国人が英語の能力を測定する際には Oller の言うように、聴解問題が英語全体の熟達度を示すかもしれないが、日本で教育を受けた日本人の場合は、現在のところ、聴解問題の得点は他の項目の得点と関連がなく、文法や読み書きの能力より低い成績が出ると言えるのではないだろうか。

日本で教育を受け、聞き取りの前提的条件となる聴力に非常に重い障害を持つ者のリスニングの成績は、口形を提示して読話させたとしても、騒音場面における健聴者のリスニングの成績と同様に、もしくはそれ以上に文法や読み書きの能力より低い成績になり、しかもその成績は英語力全体の熟達度を示していないことが予想される。

IV. 研究の意義

聴覚障害者は、補聴器によって聴覚の活用を図りながら、話し手の発声器官の動きを外部から視覚でとらえること、即ち「読話」(lipreading)を手掛かりにして音声を知覚している。読話によって伝達される音声言語の情報は、不完全なものであるので、聴覚障害者が母国語を習得する際には多大な困難を伴うが、早期教育と聴能訓練の結果、聴覚障害児の日本語によるオーラル・コミュニケーション技能は近年かなり向上してきている。耳からのごくわずかな刺激を言語と結びつけて、読話の手掛かりの一つとして活用しているためである。

そこで、日本語の読話が可能な生徒に対して聴覚活用を図りながら、読話力並びに予測文法力を高めることを目的とした指導を行えば、英語の読話能力を向上させることができ、それによって英語による聴解問題を解く力をつけることができると考える。

英語のリスニング力の代替として聴覚活用を伴う読話の能力には、英語全体の能力や、日本語の言語力、あるいは聴力が影響していることが考えられる。聴覚障害者の英語におけるリスニング力の代替の読話能力を推定しうる要因がわかれば、読話・リスニング能力を高めるための指導法を編み出すことが可能である。

また、入学試験、検定試験などの英語の学力試験を聴覚障害者が受験する際に、健聴者と同等の基準で英語の聴解力を測定することの妥当性について提言することができると考える。

本 論

I. 目 的

英語の読話・聴解力を高めることを目的とした指導を行い、指導の効果を測定することによって、指導の有効性について考察する。

II. 方 法

1. 対象：

T 大学附属聾学校高等部 3 年イ組生徒11名。

いずれも 3 歳以前に失聴し、左右の平均聴力レベルは最重度とされる 90dB 以上である。

T 大学附属聾学校高等部では、英語について能力別のクラス編成をしているが、イ組に属する生徒は 1 学年32名のうち、ほぼ上位 3 分の 1 に相当する。対象生徒は D を除いて 1 年時から週あたり 5 時間筆者が英語を担当してきた。現在は週 3 時間を英語Ⅱ、2 時間を英語ⅡC に当てている。1 年時から、始業時に挨拶の他簡単な質問をして口頭で答えさせる等のオーラル・コミュニケーションをある程度意識した指導を盛り込んできたクラスである。

D は 1 年時から 2 年時の 1 学期まではロ組にいたが、学力がついたことが認められたので、2 年の 2 学期からイ組に編入した。3 年時では H を除く生徒10名は、他の教員の指導を 2 時間受けている。

被験者についての基礎資料を表 1 および表 2 に示す。

表 1. 被験者の基礎データ (その 1)

氏名	年齢	性別	平均聴力 dB		出身中学	英語定期試験	英語テスト		英検 3 級合格時期
			右	左			A	B	
A	19	男	119	121	本校中学部	89	93	96	高 2、7 月
B	17	男	94	93	本校中学部	83	93	93	未受験
C	17	女	88	124	本校中学部	82	93	86	高 2、7 月
D	17	男	104	109	他聾学校	93	93	98	高 2、7 月
E	17	男	109	100	普通中学校	60	87	89	不合格
F	19	女	129+	129+	普通中学校	93	100	96	高 2、7 月
G	17	女	105	105	本校中学部	89	100	96	高 1、7 月
H	17	女	111	103	本校中学部	90	96	93	高 2、7 月
I	17	男	96	96	普通中学校	76	98	93	高 2、7 月
J	18	女	101	101	本校中学部	82	90	88	高 2、7 月
K	17	女	105	104	本校中学部	80	90	96	高 3、7 月
平均			良耳 103.8			83.4	93.9	93.1	

- 備考：①聴力は 3 年の 1 学期（1992 年 6 月～7 月）に測定した。
 ②英語定期試験は、3 年 1 学期に行われた中間試験と期末試験における英語 II および英語 II C の得点の平均である。
 ③テスト A、B は、序論の II で述べた山内のテストと同一の問題を作成し、2 年の 3 学期に実施したもの。得点を 100 点満点に換算して表示した。尚、被験者全体の成績は、テスト A（中 1 レベル）において健聴中学生を 1 としたときに 1.24、テスト B（中 2 レベル）において 1.27 であった。
 ④英検 3 級合格時期は、2 次試験に合格した学年と月を示す。ただし K は、1 次試験に高 2 で合格したが 2 次試験で不合格となり、高 3 で 2 次試験を再び受け、合格した。

表 2. 被験者の基礎データ (その 2)

氏 名	基礎 言語 力	読 書 力 検 査					
		読速度 (32)	読字力 (23)	読解力 (24)	語彙力 (32)	総 点 (111)	偏差値
A	50	13	20	12	22	67	48
B	89	20	15	19	20	74	51
C	100	28	22	22	29	101	71
D	44	15	20	12	12	59	44
E	40	15	16	11	15	57	44
F	100	29	20	20	25	94	64
G	66	17	20	15	22	74	51
H	100	17	19	15	25	76	52
I	94	22	22	18	26	88	60
J	73	28	20	18	20	86	58
K	96	15	16	16	22	69	49
平均	77.5	19.9	19.1	16.2	21.6	76.8	53.8
%	77.5	62.2	83.0	67.5	67.5	69.2	—

備考：①基礎言語力は、T大学附属聾学校教員が作成し、毎年高等部に入学した生徒を対象に実施している、主として日本語の語彙の運用力を測定するテストの得点を示した。100 点満点。
 ②読書力は、図書文化社の教研式全国標準読書力検査（中学）を高 1 で実施した際の項目別得点、総合点および偏差値を示した。（ ）内の数字はその項目の満点を示す。

2. 材料：

指導効果を測定する材料として、ディクテーション3題とヒアリングテスト3種類、指導中の測定として、最小対語(minimal pairs)の弁別テストを2種類、クローズテストを4題用いた。これらのテスト形式は、音声を用いた筆記試験として一般的なものである。

ディクテーション、最小対語の弁別、クローズテストは、被験者にとって全く初めてのテスト形式であった。ヒアリングテストは、なじみのある形式であった。

(1)ディクテーションの問題

①92語からなる文。英検3級の面接試験に用いられたもの。被験者は初めて接する文であり、内容、語句ともにややなじみのないものを含んでいる。

Akio has a pen pal in America. His name is Tony. This summer Tony came to Japan. Akio and his father went to the airport to meet him. Akio was very glad to see Tony, but at the same time he was very surprised that Tony was so tall. In the evening, a strange thing happened in Akio's house. After Tony took a bath, Akio went into a bathroom to take a bath himself. To his great surprise, there was no water in the bathtub. Tony took a bath the American way. (92語)

②67語からなる文。英検3級の筆記試験に主として読解力を問う問題に用いられたもの。被験者が初めて接する文であるが、内容、語句ともになじみのあるもの。

I'm going to tell you about my school life. I live near my school, so I walk to school. I usually leave home at seven forty-five and get to school at eight. We have four classes in the morning and two in the afternoon from Monday to Friday. On Saturdays we have only three in the morning. We take nine subjects. I like English the best. (67語)

③85語からなる文。使用している教科書 Daily English Course II (池田書店) から。本文を学習した翌日に予告せずに行った。

Warm air can hold a great deal of water vapor. When this air is cooled, by passing over a range of mountains, for instance, into cold air, the vapor turns back to water. At first the water is in very tiny drops, which float in the air as clouds, fog or mist, but if the cooling process continues the drops join together to form larger drops. These larger drops are too heavy for the air to support, and they fall to the ground as rain. (85 語)

(2)ヒアリングテストの問題

(英検 3 級および 4 級の試験で行われる形式によるもの。以後「ヒアリングテスト」とはこの形式のテストをさすものとする。)

①昭和61年度第1回英検3級ヒアリングテストの問題をそのまま使用した。第1部5題、第2部5題、計10題である。被験者には各問題の1～4の選択肢がプリントされた用紙をあらかじめ配付した。

(第1部)

No.1 How long does it take you to go to school?

読み上げ部分

1. It's not far.

2. By bus.

3. Twenty minutes.

4. Two kilometers.

解答用紙に印刷されている部分

No.2 I want to send a letter to America. Where do I have to go to send it?

1. To the bank.

2. To the post office.

3. To the bookstore.

4. To the bus stop.

No.3 Mary usually goes shopping in town every Saturday. How often does she usually go shopping each week?

1. Once.

2. Often.

3. On Saturdays.

4. Each week.

No. 4 Ted has bought an interesting book and has read ten pages a day for a week. How many pages has he read?

1. Seven pages.

2. Ten pages.

3. Thirty-five pages.

4. Seventy pages.

No. 5 Tom usually gets to school thirty minutes before it starts. His school starts at eight. What time does Tom usually get to school?

1. At 7:00.
2. At 7:30.
3. At 8:00.
4. At 8:30.

〔第2部〕

No. 6 "We can see many people from here on the top of the hill, Bob."

"Yes. There are some people in the park. Some are playing tennis, and others are playing baseball. Look there, Nancy. Some people are walking to the church."

Question: Where are Bob and Nancy?

1. On the top of the hill.
2. In the park.
3. Near the park.
4. In the church.

読み上げ部分

解答用紙に印刷されている部分

No. 7 "We're having a party next Monday, Jack. Won't you come and join us?"

"Of course i will. Can my sister Jane come to the party with me, Emily?"

"Sure."

Question: Who will Jack take to the party?

1. Emily.
2. Jane.
3. A friend.
4. His wife.

No. 8 "I'm very sorry. The bus came too late. Oh, it's already ten o'clock. What time did you get here?"

"I got here at nine."

Question: How long did the woman wait for the man?

1. Thirty minutes.
2. One hour.
3. One hour and a half.
4. Two hours.

No. 9 "How about going on a hike with me tomorrow?"

"I'm sorry I can't,"

"Why not?"

"Because I have too many things to do tomorrow."

Question: Why can't Tom go on a hike?

1. Because it isn't warm enough.
2. Because he's sick.
3. Because he's too busy.
4. Because he doesn't want to.

No.10 "My father came home from his trip to Hawaii. He has a lot of pictures he took there. Would you like to come and see them next Sunday, Kate?"

"Sure, Mike. I'll be glad to. Thank you for inviting me."

Question: Who took many pictures in Hawaii?

1. Kate did.
2. Mike did.
3. Kate's father did.
4. Mike's father did.

②昭和61年度第2回英検3級ヒアリングテストの問題をそのまま使用した。第1部5題、第2部5題、計10題である。

〔第1部〕

No. 1 Taro, do you know who broke the window?

1. Yes. Early in the morning.
2. Yes. Jiro was.
3. Yes. Jiro did.
4. Yes. In the kitchen.

No. 2 Did you enjoy yourself at the party?

1. Yes, I had a good time.
2. No. I enjoyed the party.
3. The party is great fun.
4. We joined the party.

No. 3 I hope I'll see you again.

1. So am I.
2. So do I.
3. So can I.
4. So I will.

No. 4 How would you like to go to the movies?

1. Have a good time!
2. I'm glad to see you!
3. Good luck to you!
4. That sounds interesting.

No. 5 The bus usually comes at 11:00, but it is already 20 minutes late. What time is it?

1. 9:20.
2. 10:20.
3. 11:20.
4. 12:20.

[第2部]

No. 6 "Here come the bus, but Paul still hasn't come."

"Let's take the next bus, shall we? It will arrive at the concert hall before the concert begins."

Question: Where are they talking?

1. On a bus.
2. In a concert hall.
3. At a bus stop.
4. In front of a concert hall.

No. 7 "Hello, this is Mike speaking, May I speak to Nancy?"

"I'm sorry Nancy is not home right now. I'm her sister. May I take a message?"

Question: To whom is Mike speaking?

1. To Nancy.
2. To Nancy's aunt.
3. To Nancy's mother.
4. To Nancy's sister.

No. 8 "Hi, Ted. Where are you going?"

"I'm going to the hospital to see Tom. He has been ill since last week. Would you come with me, Mary?"

"All right. Let's buy some flowers on the way."

Question: Where is Tom?

1. In a hospital.
2. At home.
3. In a flower shop.
4. In a library.

No. 9 "May I eat this cookie?"

"Well, you may but you had better not, Bob."

"What do you mean?"

"Look at the box. It says 'Nice for dogs'."

Question: What kind of cookies are they talking about?

1. About a delicious cookie.
2. About a cookie for pets.
3. About a very expensive cookie.
4. About eating a cookie.

No.10 "I'm afraid I must be leaving. I've enjoyed the party a lot."

"Please come over again, Betty. Let me drive you home."

"Oh, it's very kind of you."

Question: How will Betty go home?

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. By bus. | 3. By car. |
| 2. By train. | 4. On foot. |

③過去の英検3級および4級のヒアリングテストから全国の受験者全員の解答状況を示す資料に基づいて、正答率が70%以上だった問題（易）、30～69%だった問題（中）、29%以下だった問題（難）を各1題ずつ、計12題を選んで作成した。問題文の末尾に級および難易を示す。

〔第1部〕

No. 1 What sports does your brother like? (4級易)

1. He likes baseball.
2. He likes reading.
3. She likes tennis.
4. She likes music.

No. 2 How did you come to school? (3級易)

1. I saw you yesterday.
2. I know you well.
3. I came to see you.
4. I came by bus.

No. 3 Where do you usually go when you want to take a train?
(4級中)

1. To a post office.

2. To a store.

3. To a station.

4. To an airport.

No. 4 Yumi has gone to France to study art. She has been there for almost five years. She is going to come back to Japan next year. When did Yumi leave Japan? (3 級中)

1. Next year.

2. Almost three years ago.

3. Almost four years ago.

4. Almost five years ago.

No. 5 Last summer, Keiko went to Canada to see her pen pal Lucy. Lucy's father took Keiko and Lucy to the ocean. Who took Keiko to the ocean? (4 級難)

1. Keiko did.

2. Lucy did.

3. Lucy's father did.

4. Keiko's father did.

No. 6 John went to the post office to buy five stamps. But when he got there, he found that he didn't have any money with him. Was he able to buy five stamps? (3 級難)

1. He went to the post office.

2. Yes, He was.

3. He had no money.

4. No, he wasn't.

〔第2部〕

No. 7 "What are your parents doing now, Ken?"

"Father is reading a newspaper in the living room and Mother is cooking in the kitchen."

Question: Are Ken's parents home now? (4級易)

1. Yes, they are.
2. Yes, he is.
3. No, she isn't.
4. No, they aren't.

No. 8 "How are you going to spend this afternoon, Emily?"

"I'm going shopping with my mother."

Question: Where is Emily going? (3級易)

1. To a hospital.
2. To a seashore.
3. To a department store.
4. to a police station.

No. 9 "What are you going to do, Nancy?"

"I'm going to make a cake."

"Shall I help you?"

"Yes, please, Jiro."

Question: What will Nancy and Jiro do? (4級中)

1. Nancy will make a cake, but Jiro won't.
2. Jiro will make a cake, but Nancy won't.
3. They'll make a cake.
4. They won't make a cake.

No.10 "Hello."

"Hell. this is Mary speaking. Can I speak to Taro?"

"I'm afraid he's out now."

"Then, would you ask him to call me back?"

"Sure."

Question: Why can't Mary speak to Taro? (3級中)

1. Because he is speaking.
2. Because he is afraid. .
3. Because he will come soon.
4. Because he is out now.

No.11 "Where are you going, Ken?"

"I'm going to the concert. My mother is going with me, but my father is staying at home."

Question: Is Ken going to the concert with his father? (4級難)

1. Yes, he is.
2. No, he doesn't.
3. Yes, he does.
4. No, he isn't.

No.12 "How about going out to dinner tonight?"

"That sounds great! What time are you planning to go?"

"Shall we make it six o'clock?"

"O.K. I'll see you then."

Question: What are the two people going to do tonight? (3級難)

1. At six o'clock.
2. To go out to dinner.
3. To go out shopping.
4. To plan to go to a movie.

(3)最小対語の問題

母音または子音が1音だけ異なる単語の組合せで、どちらの単語を入れても意味のとおり文を用いて、2種類各12問の問題を作り、プリントして配布した。()内の一方の単語を含む文を読み上げ、どちらが読まれたか、当てさせた。

最小対語 I

1. Will you show me your (ship, sheep)?
2. Your (pan, pen) is smaller than mine.
3. I saw this (cap, cop) yesterday.
4. I was (wondering, wandering) about it.
5. Which is your (cap, cup)?
6. I have two (ankles, uncles).
7. May I use your (ball, bowl)?
8. I am looking for the (hole, hall).
9. He made a (farm, firm) house.
10. There are a lot of (gulls, girls) on the beach.
11. She handed me the (bird, board).
12. Please bring me a (bat, vat).

問題1～11は母音の弁別、12は子音の弁別に関するものである。

最小対語Ⅱ

1. When did he (live, leave) here?
2. This one is (better, bitter).
3. She didn't want to talk about the (past, pest).
4. One person has one (boat, vote).
5. She has a little (mouth, mouse).
6. How many (classes, clashes) did they have?
7. The teacher (corrected, collected) the mistakes.
8. I (hear, fear) he don't come back.
9. He took the (seat, sheet).
10. I made a (wrong, long) answer.
11. The boss (fired, hired) her.
12. This (pan, pen) used to leak.

問題1～3は母音の弁別、4～11は子音の弁別に関するものである。

問題12に、前回正解の少なかった問題2を入れ、正解は前と逆にした。

(4)クローズテストの問題

5語ごとに単語を削除し、空欄にした文章を4種類作成し、プリントを配布した。空欄の数は、1題につき16問から23問である。

クローズテスト I

Tomoko was going to visit her aunt in a small town with her mother. When they got on () bus, they saw two (). The foreigners said something () the bus driver in (). But he didn't understand (). The foreigners didn't know () to do.

Mother said () Tomoko, "You study English () school. Try to speak () them." "Will they understand () English?" she thought. She () to them and spoke () English. She knew that () were going to the () town.

After half an (), the bus got to () town. The foreigners thanked () and said, "We enjoyed () with you, Good-by."

クローズテスト II

I am enjoying my stay here in Matumoto. It is summer now, () this place isn't () hot as Boston. There () a lot of high () around this city. Many () from all over Japan () here. They enjoy climbing mountains () summer and skiing in ().

I climbed Mt. Tsubakuro () my Japanese friends three () ago. We got up () four o'clock in the () to see the rising (). It was very beautiful. () clouds below our eyes () red, yellow, gold and () other colors. I took () pictures. I'll send you () of them with my () letter.

クローズテストⅢ

It was a fine day today. It was cold in () morning. I watched TV () about an hour. After () I enjoyed reading some () books.

In the afternoon () was warm. I helped () father. He made a () for John, our pet. () is a small brown (). Every member of my () likes John. I painted () doghouse in red. John () running around it and () very happy. After dinner () the members of my () played cards. We had () very good time. A () before eight, I went () to my room and () to do my homework. () finished it at ten. () I'm writing this diary. () go to bed at ().

クローズテストⅣ

There are a lot of languages in the world. In Japan, most boys () girls study English. Why () they have to study ()? Because it is used () a lot of countries. () is a great help () a very important language () they try to understand () people of other countries. () is the best way () learn English? Listen to () English first. Then () English at every chance. () have some chances to () it around us. We () to learn much about () countries.

3. 手続き:

聴解力の伸張を図ることを目的とした指導を開始する前に、ディクテーションとヒアリングテストを実施し、ほぼ1ヵ月間の指導の後、再び同一の問題でテストを行った。聴解力を測定するテストの中でディクテーションを選んだのは、Oller らの研究により、ディクテーションが英語の総合力を反映するテスト形式であるとされていることと、実施と採点が容易であることによる。ヒアリングテストを選んだのは、被験者がテスト形式に慣れていること、検定試験や入学試験で多く用いられている形式であること、および実施と採点が容易であることによる。

最小対語とクローズテストは指導の中で扱い、そのつど正答を示した。

(1)ディクテーション

(a)実施方法

①、②、③の順に日を改めて1題ずつ行った。①、②は未知の材料だったが、③は授業で教材として扱った材料で、授業の翌日に実施した。

発話方法は、(a)本文をポーズ(pause)を置かずに1回通読した。(b)1文ずつ、あるいは意味のまとまりで区切ってゆっくり2回ずつ読んだ。(c)最後にポーズをとりながら1回通読した。いずれの場合にも句読点を口頭および手振りで示した。(b)の段階では、生徒が書き終えて顔を上げるまでポーズを置き、繰り返すと前進を口頭および手振りで示すことによって読み上げ場所の理解を促した。結果や内容については指導後の測定を終了するまで一切コメントしなかった。

ほぼ1ヵ月後に③、②、①の順で再度同じ方法でディクテーションを行うことによって指導後の測定を行い、結果を指導前の数値と比較した。③の材料は、第1学期の期末試験の範囲に含めており、指導後の測定は

当該科目の試験終了後5日目に行った。

(b)採点基準

1語を単位とし、1語1点で加点法を採った。綴り誤りは加点し（例：great → grate ○）、語形の誤りは減点した（例：American → Amirica ×）。句読点、大文字と小文字の区別は採点の対象としなかった。

①においては固有名詞のAkioとTonyが別の名前（例：Akiko, Jonny）で表記しており、一貫性があった場合は、最初の1語のみを減点し、あとの語は加点した。

②においてはI'mをI amと表記した場合は、正解として1点加点した。forty-fiveは2語とみなし、間のハイフンは問題にしなかった。

(2)ヒアリングテスト

(a)実施方法

①、②、③の順に日を改めて行った。

第1部では問題文を2回繰り返して読み上げ、印刷された四つの選択肢の中から一つを選んで○をつけることによって解答させた。第2部では、問題文が対話形式になっているので、左手と右手を交互に上げて話者の交代を示し、会話に続いて質問文を2回繰り返して読み上げた。印刷された四つの選択肢の中から一つを選んで○をつけることによって解答させた。問題番号、繰り返し、前進は口頭および手振りで示し、理解を促した。これは生徒にはなじみのある方法である。結果や内容については指導後の測定を終了するまで一切コメントしなかった。

ほぼ1ヵ月後に①、②、③の順で再度同じ方法でヒアリングテストを行うことによって指導後の測定を行い、結果を指導前の数値と比較した。

(b)採点基準

正答 1 問につき 1 点とし、①、②は10点満点、③は12点満点である。

(3)指導の内容

1 ヶ月の間、単音の読話、単語の弁別の訓練、クローズテストによる予測力の向上を目的とした訓練及び教科書を中心とした通常の指導を行った。

単音の読話には市販の英語発音練習用のビデオテープ（東京書籍、1980）の「英語の発音」を用いた。このビデオテープには、単音を発音するアメリカ人の口形が大写しされており、顔の正面からだけでなく、斜め横からも写されている。英語らしく発音することと、口形から音を読み取ることを目標に、母音 1 時間、母音の復習と子音 1 時間、子音を中心とした復習 1 時間の計 3 時間を当てた。母音の指導においては短母音と長母音、長母音と二重母音の区別、子音の指導においては r と l、f と h、b と v、s と t h の音の対立を重点的に指導し、最小対語を用いて弁別の訓練をした。

訓練の後、文の中の最小対語を弁別するテストを 2 種類、日を分けて実施した。問題は 1 問につき 3 度繰り返して読み上げた。その場で自己採点させ、説明を加えた。

クローズテスト 4 題を 3 日に分けて実施した。問題文は区切らずに、全体を 3 度繰り返して読み上げた。解答を示しながら、文法的な知識や前後関係から判断して予測することを指導した。

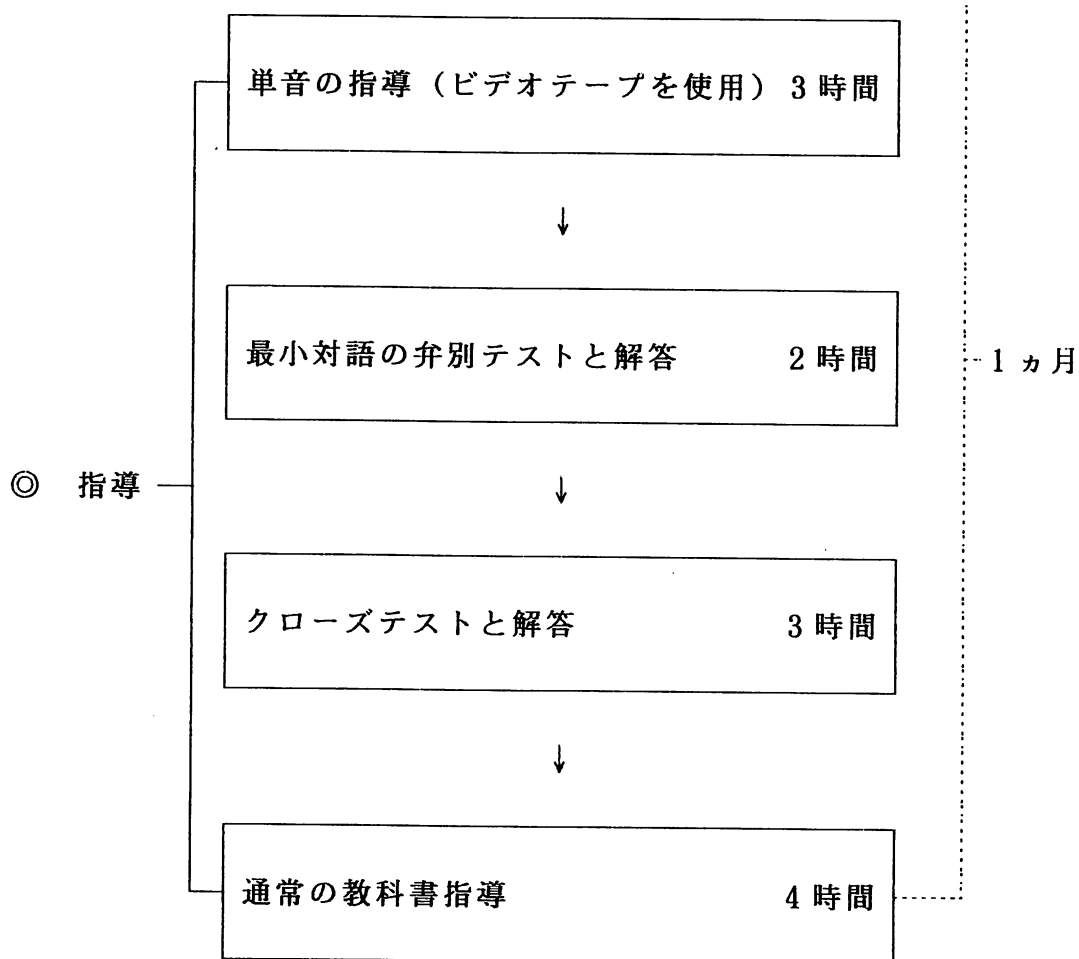
その後通常の教科書指導を行ったが特に話法の転換を扱う中で、英語の語順に注意を向けさせることに留意した。

英語Ⅱおよび英語ⅡCの授業は週あたり合計 5 時間設けられているが、

1ヵ月の間に期末試験等の行事が行われ、指導時間は12時間であった。

指導の流れを図3に示す。

◎ 指導前の測定(ディクテーション ①②③、ヒアリングテスト①②③)



◎ 指導後の測定(ディクテーション ③②①、ヒアリングテスト①②③)

図3. 指導と測定の手順の流れ図

Ⅲ. 結 果

ディクテーション①、②、ヒアリングテスト①、②、③において、全体の得点の平均値は指導前より指導後が高かった。但し個人差が大きく、どの問題においても指導前より指導後の得点が高かった被験者がいる半面、問題によっては指導前の得点が指導後の得点より高い被験者もみられた。教科書から題材を採ったディクテーション③においては、ほとんどの被験者の得点が指導前より指導後が低かった。

1. ディクテーション

ディクテーションの結果を表3に示す。

表 3. ディクテーションの結果

氏 名	① 9 3 語			② 6 7 語			③ 8 5 語		
	指導 前	指導 後	前後 差	指導 前	指導 後	前後 差	指導 前	指導 後	前後 差
A	8	5	-3	16	15	-1	5	13	8
B	10	33	23	30	27	-3	23	18	-5
C	33	36	3	39	49	10	38	32	-6
D	15	10	-5	24	29	5	54	45	-9
E	21	27	6	35	40	5	22	14	-8
F	19	34	15	21	28	7	83	77	-6
G	28	49	21	59	63	4	74	75	1
H	25	32	7	33	40	7	60	27	-33
I	19	33	14	17	35	18	48	20	-28
J	20	19	-1	26	36	10	83	27	-56
K	17	29	12	41	50	9	83	67	-16
計	215	307	92	341	412	71	573	415	-158
%	21.1	30.0		46.3	55.9		61.3	44.4	

①においては指導前の得点より指導後の得点が上昇した者が 8 名あるが、下降した者も 3 名いた。平均得点率は 21.1 % から 30.0 % に伸びている。②においては上昇した者が 9 名、下降した者が 2 名であった。平均得点率は 46.3 % から 55.9 % に伸びている。③においては、上昇した者が 2 名、下降した者が 11 名で、平均得点率は 61.3 % から 44.4 % に下降した。3 題それぞれの結果を棒グラフによって図 4 ～ 6 に、①～③の合計得点を積み重ねグラフによって図 7 に示す。

点

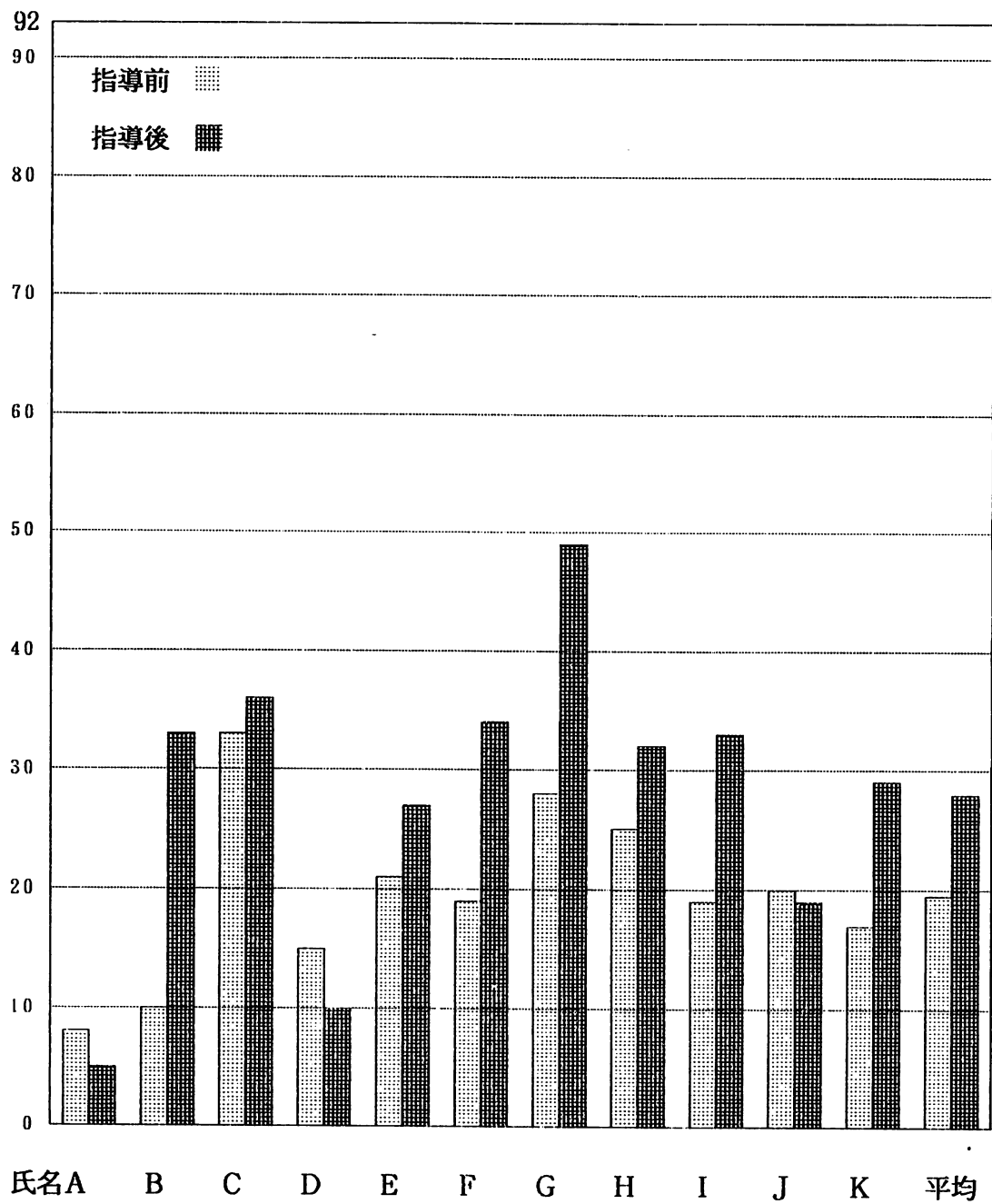


図4. ディクテーション①指導前・指導後比較グラフ

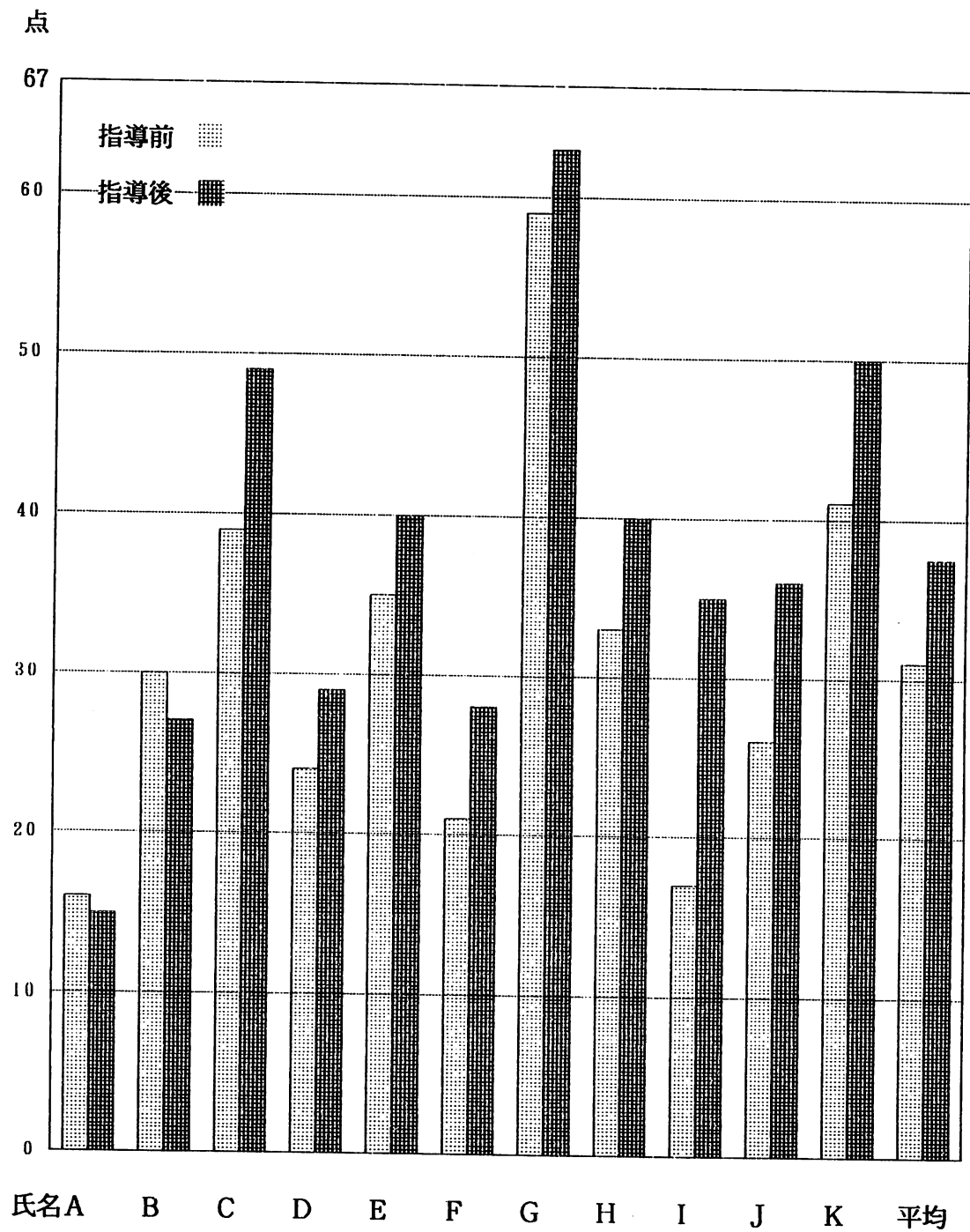


図5. ディクテーション②指導前・指導後比較グラフ

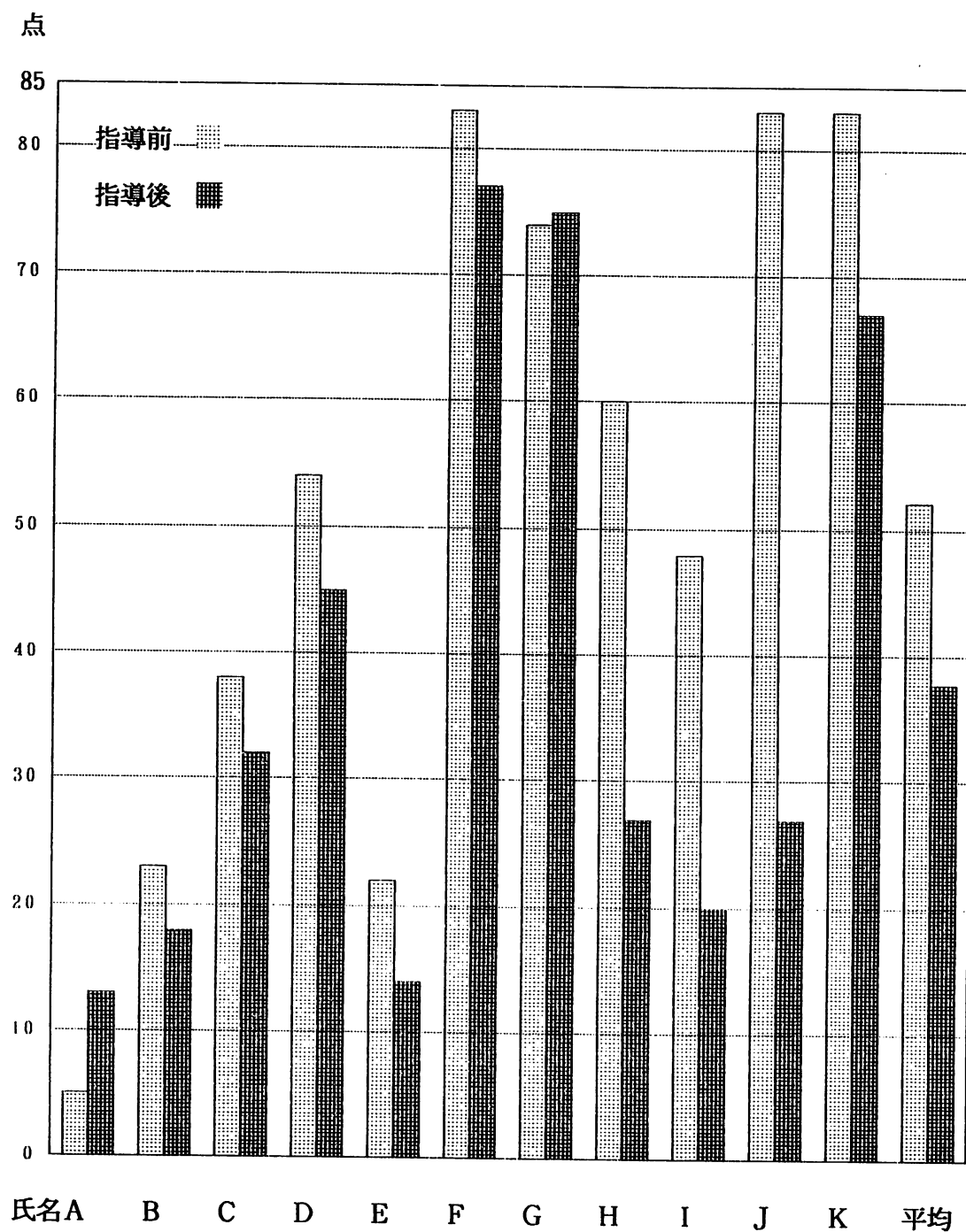


図6. ディクテーション③指導前・指導後比較グラフ

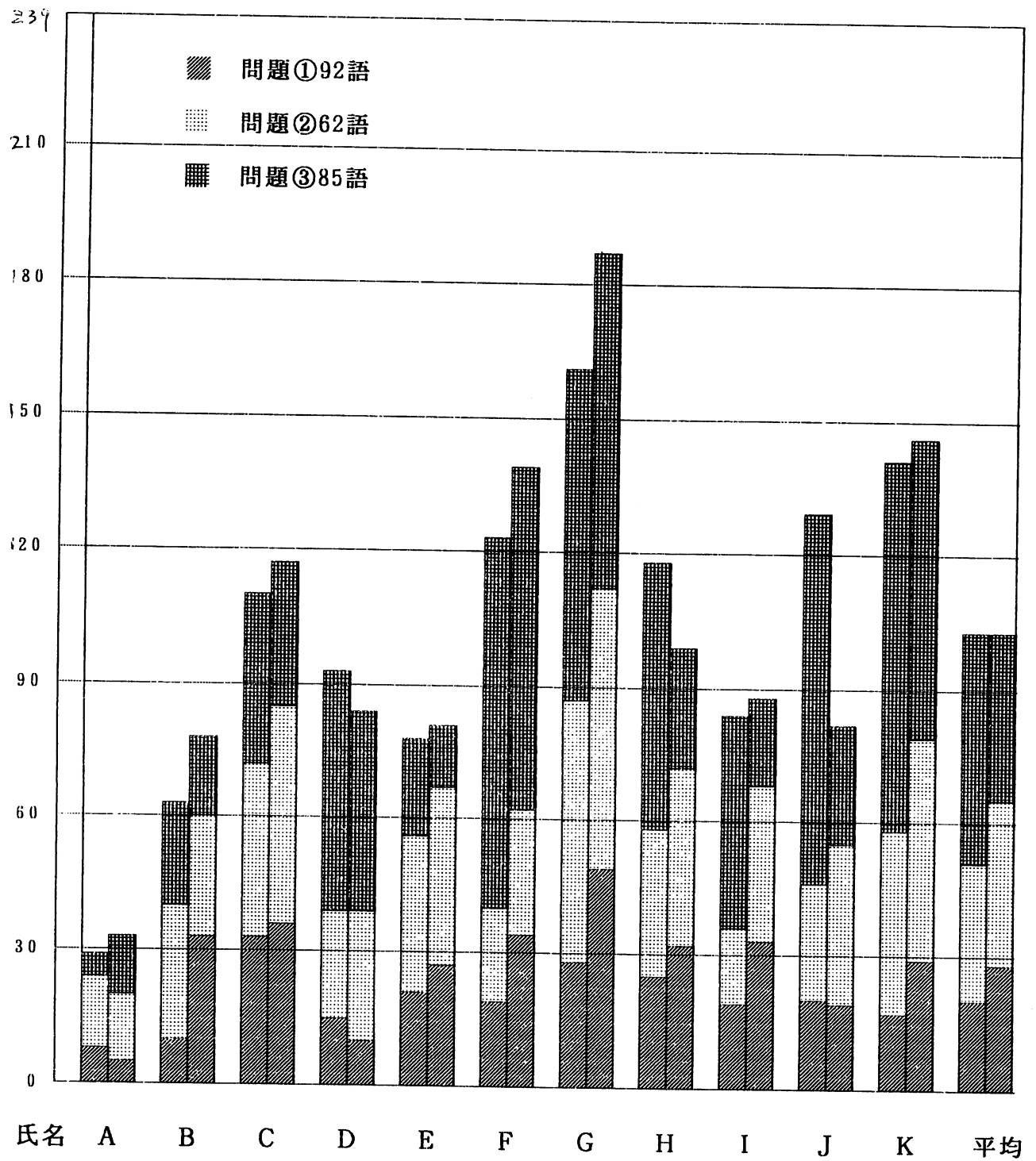


図7. ディクテーション指導前・指導後比較グラフ

t 検定での結果を下に示す。

① $t = 2.93$ $P < 0.05$ $df = 10$

従って指導前と指導後の平均得点の差は有意である。

② $t = 3.78$ $P < 0.05$ $df = 10$

従って指導前と指導後の平均得点の差は有意である。

③ $t = -2.62$ $P < 0.05$ $df = 10$

従って指導前と指導後の平均得点の差は有意であるが、①、②の異なり指導前より指導後が低くなっている。

次に①と②の合計得点およびその指導前、指導後の差と、伸び率および平均伸び率に対する+-を表4に示す。

表 4. ディクテーション①②合計

氏 名	①指 導前	②指 導前	①② 合計	順 位	①指 導後	②指 導後	①② 合計	順 位	指導 前後 差	伸 び 率%	29 + -
A	8	16	24	(11)	5	15	20	(11)	-4	-17	-
B	10	30	40	(7)	33	27	60	(8)	20	50	+
C	33	39	72	(2)	36	49	85	(2)	13	18	-
D	15	24	39	(9)	10	29	39	(10)	0	0	-
E	21	35	56	(5)	27	40	67	(6)	11	20	-
F	19	21	40	(7)	34	28	62	(7)	22	55	+
G	28	59	87	(1)	49	63	112	(1)	25	29	0
H	25	33	58	(3)	32	40	72	(4)	14	24	-
I	19	17	36	(10)	33	35	68	(5)	32	89	+
J	20	26	46	(6)	19	36	55	(9)	9	20	-
K	17	41	58	(3)	29	50	79	(3)	21	36	+
計	215	341	556		307	412	719		163		
%	21.1	46.3	32.6		30.0	55.9	42.2		9.6	29.3	

注：伸び率とは、指導前の得点に対する、指導前後の差の割合を%で示したものである。

29+-とは、伸び率の平均値29.3と個々の被験者の伸び率を比較し、+-で示したものである。

2. ヒアリングテスト

ヒアリングテスト①においては指導前の得点より指導後の得点が上昇した者が8名、変化のなかった者が2名、下降した者が1名で、平均得点率は25.5%から35.5%に上昇した。

②においては、上昇した者が4名、変化のなかった者が4名、下降した者が3名であった。平均得点率は38.1%から42.7%に上昇した。

③においては上昇した者が9名、変化のなかった者が2名、下降した者はいなかった。平均得点率は43.2%から55.3%に伸びた。

結果を表5～7および図8～10に示す。

表5. ヒアリングテスト①（正答を1、誤答を0で示す）

氏名		第 1 部					第 2 部					合 計			
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	前	後	差	
A	前	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		1	
	後	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0		3		
B	前	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2		1	
	後	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0		3		
C	前	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		3	
	後	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1		4		
D	前	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2		1	
	後	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1		3		
E	前	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2		-1	
	後	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		1		
F	前	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	3		0	
	後	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0		3		
G	前	1	1	0	0	1	0	0	1	1	0	5		1	
	後	1	1	0	0	1	0	0	1	1	1		6		
H	前	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2		1	
	後	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0		3		
I	前	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	5		2	
	後	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1		7		
J	前	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2		2	
	後	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1		4		
K	前	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		0	得点率
	後	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0		2		
前合計		7	6	1	3	2	0	1	2	4	2	28		11	25.5
後合計		5	8	0	1	3	3	3	4	6	6		39		35.5
前－後		-2	2	-1	-2	1	3	2	2	2	4	11			伸率
前＋後		12	14	1	4	5	3	4	6	10	8	67			39.3

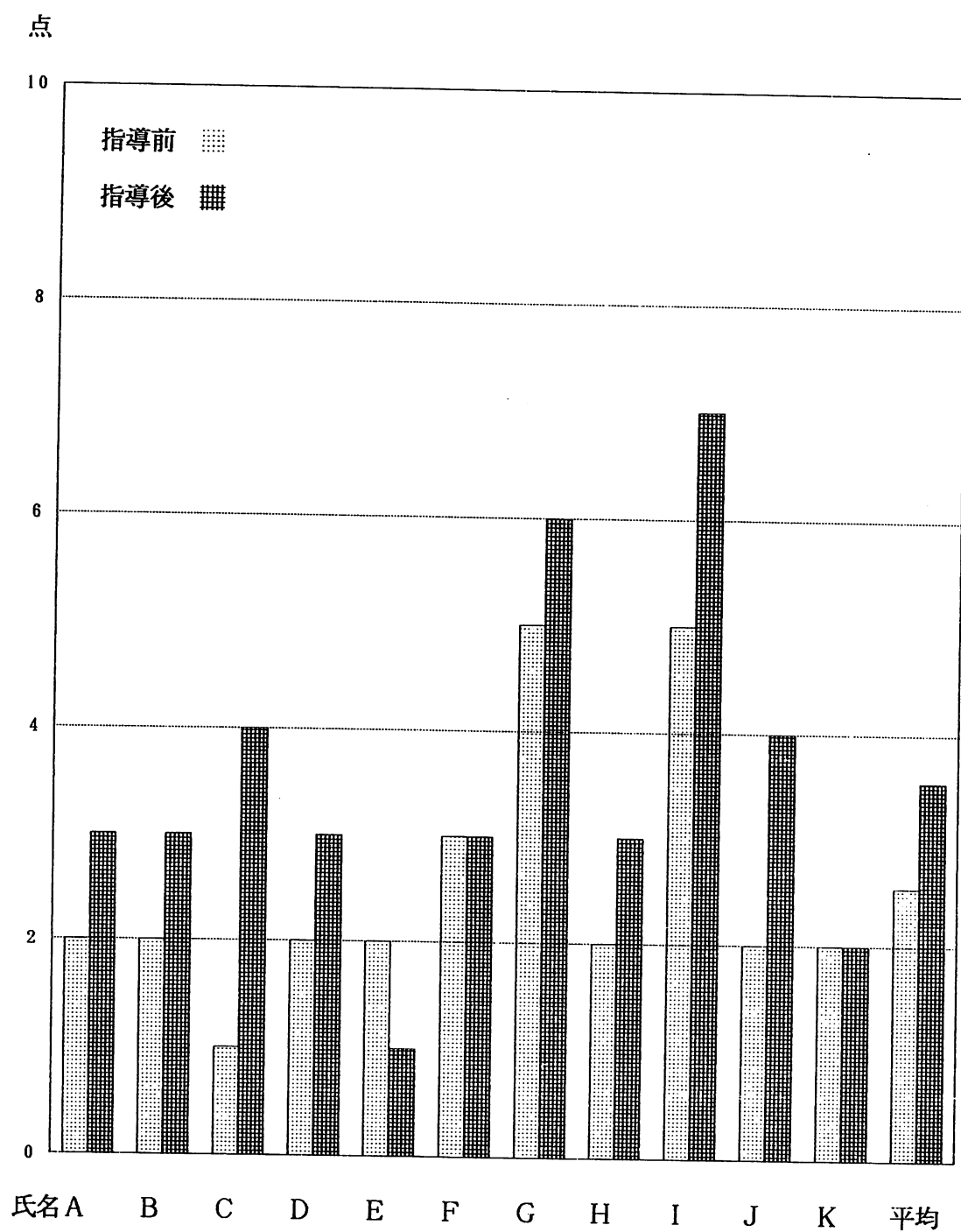


図8. ヒアリングテスト①指導前・指導後比較グラフ

表 6 . ヒアリングテスト②

氏 名		第 1 部					第 2 部					合 計			
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	前	後	差	
A	前	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	7		-4	
	後	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0		3		
B	前	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	4		0	
	後	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0		4		
C	前	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	5		-1	
	後	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0		4		
D	前	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	6		-3	
	後	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0		3		
E	前	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2		1	
	後	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0		3		
F	前	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2		7	
	後	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1		9		
G	前	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	7		0	
	後	0	0	1	1	1	0	1	1	1	1		7		
H	前	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3		0	
	後	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0		3		
I	前	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2		1	
	後	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0		3		
J	前	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3		0	
	後	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0		3		
K	前	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		4	得点率
	後	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0		5		
前合計		1	4	6	2	6	3	6	8	3	3	42		5	38.1
後合計		2	2	7	3	8	0	9	8	6	2		47		42.7
前－後		1	-2	1	1	2	-3	3	0	3	-1	5			伸率
前＋後		3	6	13	5	14	3	14	16	9	5	89			11.9

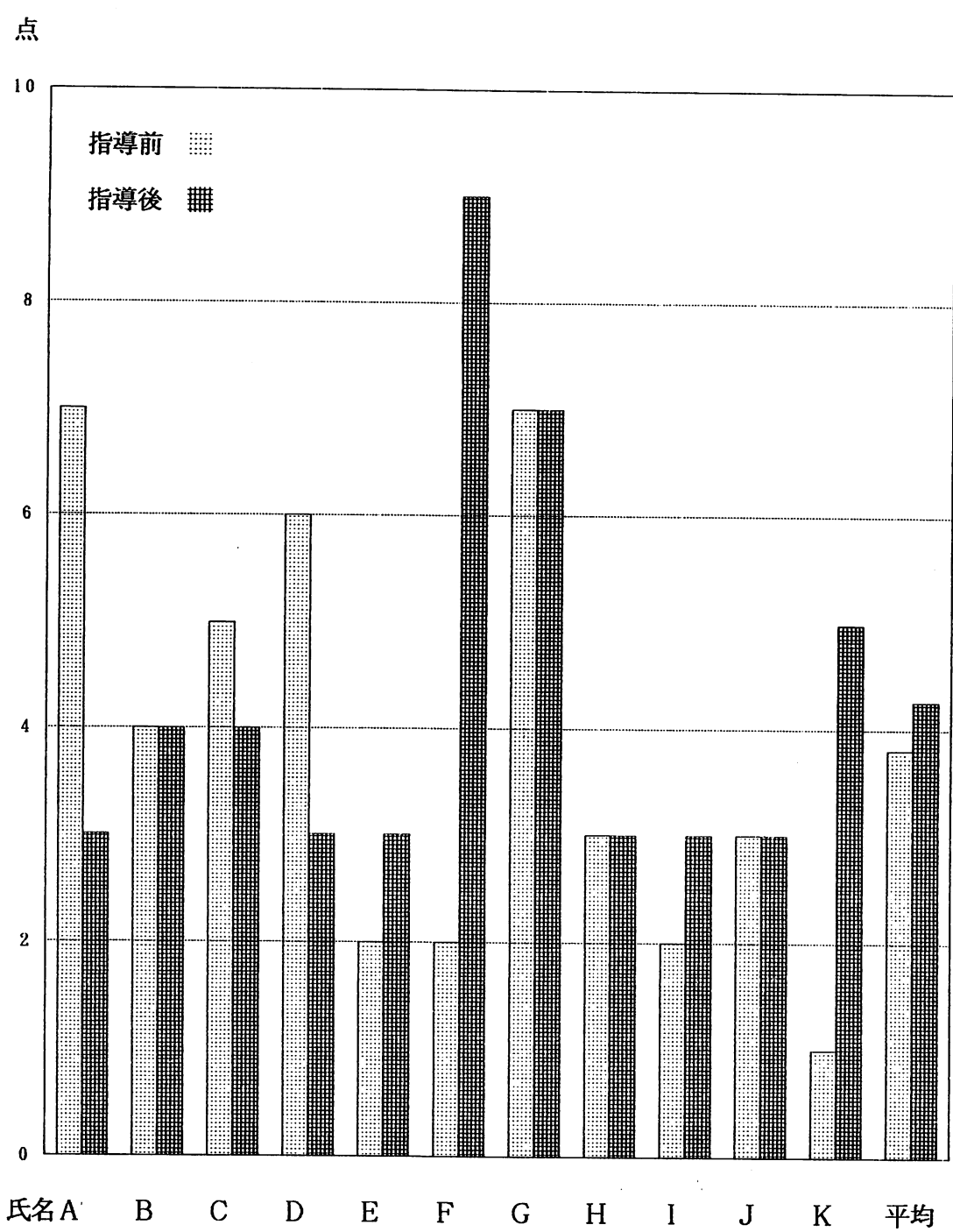


図9. ヒアリングテスト②指導前・指導後比較グラフ

表 7. ヒアリングテスト③

氏 名		1 部						2 部						指導 前得点	指導 後得点	前 後 差	
		4 易	3 易	4 中	3 中	4 難	3 難	4 易	3 易	4 中	3 中	4 難	3 難				
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫				
A	前	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	5		1	
	後	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1		6		
B	前	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	5		1	
	後	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1		6		
C	前	1	0	1	1	1	0	0	1	1	0	1	0	7		2	
	後	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1		9		
D	前	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	5		1	
	後	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0		6		
E	前	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	5		3	
	後	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	0	0		8		
F	前	0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	0	1	7		0	
	後	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0	0	0		7		
G	前	1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	6		3	
	後	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0		9		
H	前	1	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	5		2	
	後	1	1	0	1	1	0	0	1	1	0	1	0		7		
I	前	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2		1	
	後	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0		3		
J	前	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	4		0	
	後	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		4		
K	前	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	6		2	
	後	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	0		8		
前合計		5	9	6	6	6	1	4	8	5	0	3	4	57		16	得点率
後合計		9	8	8	7	9	0	5	10	5	3	5	4		73		43.2
前－後		4	-1	2	1	3	-1	1	2	0	3	2	0	16		伸率	
前＋後		14	17	14	13	15	1	9	18	10	3	8	8	130		28.1	

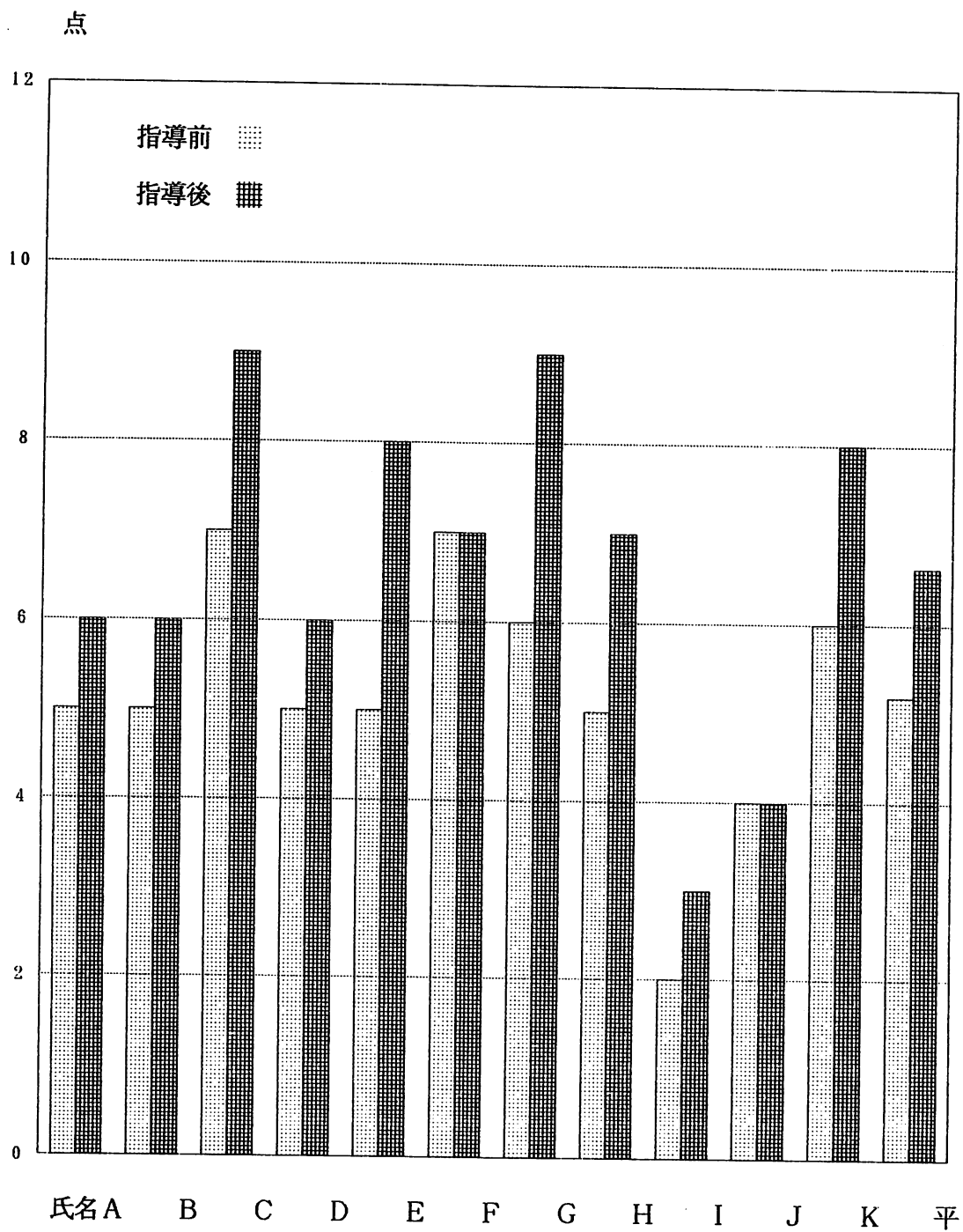


図10. ヒアリングテスト③指導前・指導後・比較グラフ

t 検定の結果を次に示す

① $t=3.03$ $p < 0.05$ $df=10$

従って指導に効果があったと言える。

② $t=0.50$ $P > 0.05$ $df=10$

従って指導に効果があったとは言にくい。

③ $t=4.66$ $P < 0.05$ $df=10$

従って指導に効果があったと言える。

①②③を合計した得点を図11および表8に示す。

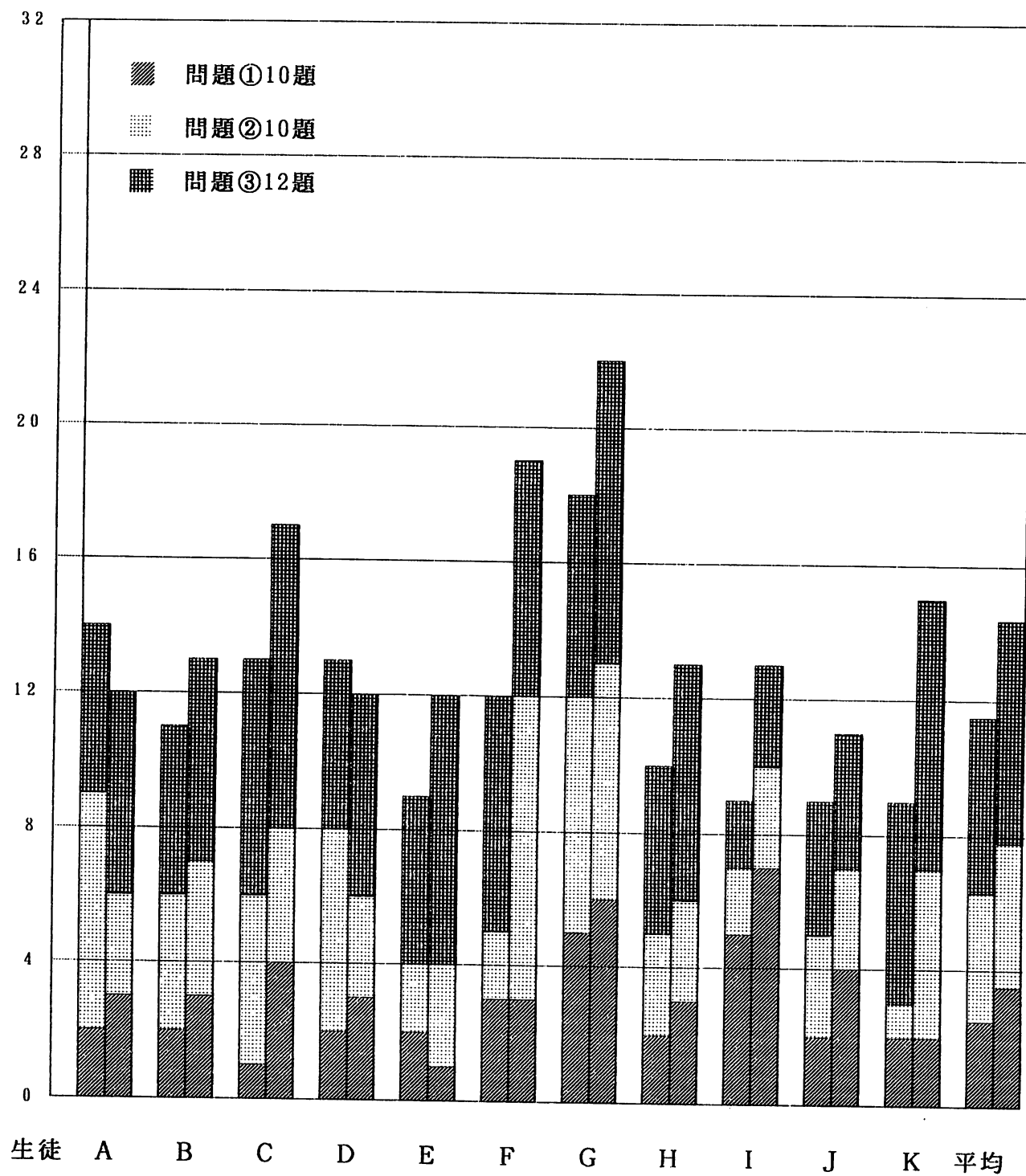


図11. ヒアリングテスト指導前・指導後比較グラフ

表 8. ヒアリングテスト合計得点

氏 名	指導前①②③			指導後①②③			指導 前後 の差	伸び 率%	25 + -
	合計	率	順	合計	率	順			
A	14	44	(2)	12	38	(8)	-2	-14	-
B	11	34	(6)	13	41	(5)	2	18	-
C	13	41	(3)	17	53	(3)	4	31	+
D	13	41	(3)	12	38	(8)	-1	-8	-
E	9	28	(8)	12	38	(8)	3	33	+
F	12	38	(5)	19	59	(2)	7	58	+
G	18	56	(1)	22	69	(1)	4	22	-
H	10	31	(7)	13	41	(5)	3	30	+
I	9	28	(8)	13	41	(5)	4	44	+
J	9	28	(8)	11	34	(11)	2	22	-
K	9	28	(8)	15	47	(4)	6	67	+
計	127			159			32		
均	11.5	36		14.5	45		3	25.2	

合計点についてt-検定を行った結果

$t=3.98$ $P < 0.05$ $df=10$

従って3つのヒアリングテストを総合して見ると、グループ全体に対する指導の効果があったとみなすことができる。

3. 最小対語

問題文と答えを示す。

問題 I

- | | |
|---|-------------|
| 1. Will you show me your (ship, sheep)? | (ship) |
| 2. Your (pan, pen) is smaller than mine. | (pan) |
| 3. I saw this (cap, cop) yesterday. | (cop) |
| 4. I was (wondering, wandering) about it. | (wandering) |
| 5. Which is your (cap, cup)? | (cup) |
| 6. I have two (ankles, uncles). | (ankles) |
| 7. May I use your (ball, bowl)? | (bowl) |
| 8. I am looking for the (hole, hall). | (hole) |
| 9. He made a (farm, firm) house. | (firm) |
| 10. There are a lot of (gulls, girls) on the beach. | (girls) |
| 11. She handed me the (bird, board). | (board) |
| 12. Please bring me a (bat, vat) | (bat) |

結果を表 9 に示す。

表 9. 最小対語テスト I 結果 (正答 : 1、誤答 : 0)

氏 名	問題番号												得 点 計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
正	ɪ	æ	ɑ	ɑ	ʌ	æ	ou	ou	ə:	ə:	ɔ:	b	
誤	i:	e	æ	ʌ	æ	ʌ	ɔ:	ɔ:	ɑ:	ʌ	ə:	v	
A	1	0	1	0	1	0	0	0	1	1	1	1	7
B	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	10
C	1	0	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	8
D	1	0	1	0	0	1	1	1	0	1	1	1	8
E	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	1	7
F	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	9
G	1	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	8
H	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	10
I	1	1	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	6
J	1	0	1	1	0	1	1	1	0	1	0	1	8
K	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	9
計	10	1	10	5	9	8	7	8	6	7	10	9	90
%	91	9	91	45	82	73	64	73	55	64	91	82	68

問題 II

1. When did he (live, leave) here? (leave)
2. This one is (better, bitter). (bitter)
3. She didn't want to talk about the (past, pest). (past)
4. One person has one (boat, vote). (vote)
5. She has a little (mouth, mouse). (mouth)
6. How many (classes, clashes) did they have? (classes)
7. The teacher (corrected, collected) the mistakes. (corrected)
8. I (hear, fear) he don't come back. (hear)
9. He took the (seat, sheet). (sheet)
10. I made a (wrong, long) answer. (long)
11. The boss (fired, hired) her. (fired)
12. This (pan, pen) used to leak. (pen)

問題 1 ～ 3 は母音に関するもの。4 ～ 11 は子音に関するもの。問題 12 に前回正答が少なかった問題 2 と正解が逆になる問題を入れた。結果を表 10 に示す。

表10. 最小対語Ⅱ結果およびⅠ、Ⅱ計

氏 名	問題番号												得 点 計	Ⅰ Ⅱ 合計	順 位
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
正	i:	ɪ	æ	v	θ	s	r	h	ʃ	l	f	e			
誤	ɪ	e	e	b	s	ʃ	l	f	s	r	h	æ			
A	1	0	1	1	0	0	0	1	1	1	0	1	7	14	(10)
B	1	1	0	1	0	0	1	1	1	0	1	0	7	17	(5)
C	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	0	9	17	(5)
D	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	11	19	(1)
E	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	10	17	(5)
F	1	1	0	1	1	0	0	1	0	1	1	1	8	17	(5)
G	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	11	19	(1)
H	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	0	1	9	19	(1)
I	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	1	6	12	(11)
J	1	1	1	1	0	1	0	1	1	0	1	1	9	17	(5)
K	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	1	1	9	18	(4)
計	11	9	7	10	7	6	5	10	6	7	9	9	96	186	
%	100	82	64	91	64	55	45	91	55	64	82	82	73	70	

全体では7割の正答率で、好成績であったといえる。問題による正答率を見ると、母音では〔æ〕と〔e〕、〔ʌ〕と〔a〕、〔ə:]と〔ɔ:]が、子音では〔r〕と〔l〕、〔s〕と〔ʃ〕、〔s〕と〔θ〕が弁別しにくかった。正答者が1名だけだったIの2は、答え合わせの段階で何度も発音し、口形を見せたが、筆者の口形では〔e〕と〔æ〕の弁別は非常に難しかった。大部分の被験者は、二つの語を全く同じものに読み取り、その上でなじみのあるpenのほうを選択していたことが判明した。

Berger(1970)は45人の健聴のアメリカ成人を被験者に、個々の母音の口形による読み取りの調査を行った。その結果〔e〕と発音して〔e〕と読み取れたのは語頭にある場合に23.0%、語尾にある場合に39.3%で、〔e〕を〔æ〕と誤読したのは語頭にある場合に34.1%、語尾にある場合に29.6%であり、〔æ〕と発音して〔æ〕と読み取れたのは語頭にある場合に60.7%、語尾にある場合に63.7%で、〔æ〕を〔e〕と誤読したのは語頭にある場合に11.9%、語尾にある場合に7.4%であったと報告している。〔æ〕と〔e〕の視覚による弁別は健聴のアメリカ成人にも難しいことがわかる。

最小対語の問題Iの4は正答者が5名で正答率が50%に満たなかった。wondering もwandering も生徒にはなじみのない単語であった。後者の母音を〔a〕と発音するとき、口形による弁別はかなり難しい。しかしながらBergerの調査では〔ʌ〕と〔a〕を互いに誤読するのは、〔ʌ〕が語尾にある場合に〔a〕と誤読する場合が10.4%、また〔ɔ〕と誤読する場合が7.4%あるだけで、健聴のアメリカ成人には判別し易い母音であるといえる。本研究の被験者は、〔ʌ〕と〔a〕については健聴のアメリカ人とは異なる傾向を示した。

問題 9 の〔ə:〕と〔ɔ:〕も正答率が低いが、Berger の調査には長母音の〔ə:〕と〔ɔ:〕についての調査はない。短母音の〔ə〕と〔ɔ〕については相互の誤読は全くなかった。

子音について Elber (1972) は 6 名のアメリカ人聴覚障害児 (9 歳から 14 歳) を被験者に、母音にはさまれた子音の読話の識別をテストした。

その結果 [l] は母音 [i] に挟まれて [ili] と発音されたときに [n][d][t][h] と、母音 [u] に挟まれて [ulu] と発音されたときに [n] との混同が若干みられ、[a] に挟まれて [ala] と発音されたときには完全に読み取ることができた。[r] は母音 [i] に挟まれて [iri] と発音されたときに [w] との混同がかなりみられたが、母音 [u] に挟まれて [uru] と発音されたときに [n][l][w][h][d] の順に混同がみられた。[a] に挟まれて [ara] と発音されたときには [w] との混同がわずかにみられた。つまり、アメリカ人の聴覚障害者にとっては、[l] と [r] は区別しにくい子音ではない。

[l] と [r] の弁別は、日本人がとりわけ弱いと言われている。ビデオテープを用いた指導でも指導目標としてとりあげたが、口形や調音点の違いを視覚的に識別できるようにならなかった。

Hirobe and Fujisaki (1974) は学習開始後数カ月の中学 1 年生 125 名、高校 1 年生 86 名、大学 1 年生 91 名、大学卒業生 86 名を被験者に、22 の音素について音素の弁別の成績を調べた。子音の中では v/b、r/l、f/h が弁別しにくい音の上位に位置づけられているが、聴覚障害者が視覚的に音を判断する場合には v/b、f/h は比較的容易であり、r/l は健聴者と同様に困難であると言えよう。

[s][ʃ] は Elber の調査ではごくわずかに混同が生じるだけで、アメリカ人の聴覚障害者には混同しやすい子音ではないことがわかる。健聴

の日本人では中学1年で57.4%の誤答が見られたが、大卒では18.3%に減少している。

〔s〕と〔θ〕についてはElber の調査では一例も混同がみられなかった。日本人では中1で57.6%、大卒で37.8%あり、発達に伴う誤読の減少の度合いが小さい音であることを示している。

被験者の子音について誤読の傾向は、どちらかといえばアメリカの聴覚障害者の傾向より日本の健聴者の傾向と似ている。これは英語の発音を学習する際、日本語の音韻に依存しているからではないかと思われる。カタカナを用いて指導を受けることの影響も大きいと考えられる。

4. クローズテスト

クローズテストの問題と答えを示す。

問題 I :

Tomoko was going to visit her aunt in a small town with her mother. When they got on ①a bus, they saw two ②foreigners. The foreigners said something ③to the bus driver in ④English. But he didn't understand ⑤them. The foreigners didn't know ⑥what to do.

Mother said ⑦to Tomoko, "You study English ⑧at school. Try to speak ⑨to them." "Will they understand ⑩my English?" she thought. She ⑪went to them and spoke ⑫in English. She knew that ⑬they were going to the ⑭same town.

After half an ⑮hour, the bus got to ⑯the town. The foreigners thanked ⑰Tomoko and said, "We enjoyed ⑱talking with you. Good-by."

結果を表11に示す。

表11. クローズテストI結果 注: 正解は1で、無答は-、誤答は具体的に示した。

氏名	① a	② foreigners	③ to	④ English	⑤ them	⑥ what	⑦ to	⑧ at	⑨ to	⑩ my	⑪ went	⑫ in	⑬ they	⑭ same	⑮ hour	⑯ the	⑰ Tomoko	⑱ talking	合計 正答数	正答率
A	the	-	-	-	-	1	1	1	1	the	washes	to	-	-	1	1	-	doing	6	33
B	the	-	-	-	seven	1	1	-	1	-	-	both	-	them	1	1	-	playing	5	28
C	the	1	1	1	1	1	1	a	your	1	try	1	1	1	1	1	1	1	14	78
D	the	1	1	1	1	1	1	a	English	by	1	1	1	small	1	1	1	going	12	67
E	the	1	1	this	-	1	1	1	1	1	walk	1	1	1	oure	1	1	to	12	67
F	by	1	1	1	1	1	1	1	1	1	-	1	1	this	1	1	1	1	15	83
G	the	1	1	1	1	1	1	1	1	by	1	1	1	1	1	1	1	1	16	89
H	the	foreigner	1	-	-	1	1	1	1	by	what	1	-	-	1	1	1	going	9	50
I	the	1	1	here	English	1	1	high	1	1	1	her	1	cheep	1	1	1	1	12	67
J	the	1	1	1	1	1	1	1	1	by	what	1	foreigners	small	1	1	1	1	13	72
K	the	1	1	1	1	1	1	1	1	by	want	1	1	1	1	1	1	1	15	83
計	0	8	9	6	6	11	11	7	9	4	3	8	7	4	10	11	9	6	129	
%	0	73	82	55	55	100	10	64	82	36	27	73	64	36	91	100	82	55		65

問題 II

I am enjoying my stay here in Matumoto. It is summer now, ① but this place isn't ② as hot as Boston. There ③ are a lot of high ④ mountains around this city. Many ⑤ people from all over Japan ⑥ come here. They enjoy climbing mountains ⑦ in summer and skiing in ⑧ winter.

I climbed Mt. Tsubakuro ⑨ with my Japanese friends three ⑩ days ago. We got up ⑪ at four o'clock in the ⑫ morning to see the rising ⑬ sun. It was very beautiful. ⑭ The clouds below our eyes ⑮ turned red, yellow, gold and ⑯ some other colors. I took ⑰ many pictures. I'll send you ⑱ some of them with my ⑲ next letter.

結果を表12に示す。

表12 クローズテストⅡ結果

	① but	② as	③ are	④ mountains	⑤ people	⑥ come	⑦ in	⑧ winter	⑨ with	⑩ days	⑪ at	⑫ many	⑬ sun	⑭ The	⑮ turned	⑯ some	⑰ many	⑱ some	⑲ next	Ⅱ 合計 正答数	正答率
A	In	1	1	1	1	in	1	whatever	1	years	1	—	—	They	with	the	some	all	wrote	7	37
B	—	to	—	mountain	—	have	1	1	1	1	1	1	than	—	—	them	1	—	—	7	37
C	1	so	1	mountain	1	have	1	1	well	years	1	1	1	1	—	1	1	think	write	11	58
D	1	so	1	1	1	are	1	1	1	years	1	1	1	1	were	the	my	think	written	11	58
E	what	—	1	—	1	have	it	1	well	years	1	1	—	that	and	many	1	same	like	6	32
F	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	—	—	—	1	pictures	write	13	68
G	1	so	1	1	1	came	1	1	1	1	1	1	1	1	shine	changed	1	1	1	15	79
H	1	1	1	—	—	in	1	1	1	day	1	—	1	—	—	the	—	—	1	9	47
I	1	1	1	building	for	in	1	1	in	years	1	house	yet	But	very	any	the	color	beautiful	6	32
J	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K	1	so	1	1	1	came	1	1	1	1	1	1	—	1	feel	the	1	picture	—	12	63
計	6	4	9	5	7	1	9	9	7	4	10	7	5	4	0	1	6	1	2	97	
率	60	40	90	50	70	10	90	90	70	40	100	70	50	40	0	10	60	10	20		51

問題Ⅲ

It was a fine day today. It was cold in ①the morning. I watched TV ②for about an hour. After ③that I enjoyed reading some ④comic books.

In the afternoon ⑤it was warm. I helped ⑥my father. He made a ⑦doghouse for John, our pet. ⑧It is a small brown ⑨dog. Every member of my ⑩family likes John. I painted ⑪the doghouse in red. John ⑫was running around it and ⑬looked very happy. After dinner ⑭all the members of my ⑮family played cards. We had ⑯a very good time. A ⑰little before eight, I went ⑱up to my room and ⑲began to do my homework. ⑳I finished it at ten. ㉑Now I'm writing this diary. ㉒I go to bed at ㉓eleven.

結果を表13に示す。

表13. クローズテストⅢ結果

	① the	② for	③ that	④ comic	⑤ it	⑥ my	⑦ doghouse	⑧ It	⑨ dog	⑩ family	⑪ the	⑫ was	⑬ looked	⑭ all	⑮ family	⑯ a	⑰ little	⑱ up	⑲ began	⑳ I	㉑ Now	㉒ I	㉓ eleven	Ⅲ 合計	正答率
A	this	1	—	comik	1	1	—	This	1	1	this	1	your	on	1	1	—	come	went	Cards	1	1	1	11	48
B	1	1	long	—	1	1	to	1	John	1	1	1	look	1	1	—	—	1	—	1	—	1	1	14	61
C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D	1	1	nice	1	1	1	1	1	now	1	its	1	had	on	1	1	—	1	finished	1	1	1	1	16	70
E	1	1	night	1	1	1	house	1	day	1	to	1	—	on	1	1	this	—	you	1	though	1	ereven	12	52
F	1	1	these	1	1	1	house	1	1	1	1	1	1	1	1	1	—	—	1	1	1	1	1	19	83
G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
I	1	1	nice	comedy	1	1	1	He	1	1	1	1	looking	1	1	1	—	1	1	1	1	1	1	18	78
J	1	1	those	1	1	1	half	This	town	1	that	1	to	on	1	—	hour	got	finish	1	1	1	1	12	52
K	1	1	does	of	1	1	house	1	John	1	1	1	to	home	1	1	June	way	—	1	There	1	1	13	57
計	7	8	0	4	8	8	2	5	3	8	4	8	1	3	8	6	0	3	2	7	5	8	7	115	63
%	88	100	0	50	100	100	25	63	38	100	50	100	13	38	100	75	0	38	25	88	63	100	88		

問題IV

There are a lot of languages in the world. In Japan, most boys ①and girls study English. Why ②do they have to study ③English? Because it is used ④in a lot of countries. ⑤It is a great help ⑥and a very important language ⑦when they try to understand ⑧the people of other countries. ⑨What is the best way ⑩to learn English? Listen to ⑪good English first. Then ⑫use English at every chance. ⑬We have some chances to ⑭use it around us. We ⑮have to learn much about ⑯other countries.

結果を表14に示す。

表14 クローズテストIV結果

氏名	① and	② do	③ English	④ in	⑤ It	⑥ and	⑦ when	⑧ the	⑨ what	⑩ to	⑪ good	⑫ use	⑬ We	⑭ use	⑮ have	⑯ other	IV 合計	率
A	1	1	1	English	English	—	and	all	1	1	little	little	you	do	1	another	6	38
B	—	1	1	to	1	—	1	—	1	1	—	—	1	—	1	1	9	56
C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D	1	1	1	to	1	—	1	many	1	1	—	is	1	do	1	1	10	63
E	1	1	it	to	1	1	1	to	1	your	do	you	1	stay	1	1	9	56
F	1	1	it	1	1	—	1	1	1	1	you	—	1	—	1	1	11	69
G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
I	1	1	it	to	1	to	1	to	1	1	hear	Our	1	know	1	many	8	69
J	—	1	1	In	This	it	1	to	1	1	learn	to	1	every	1	another	7	44
K	1	1	1	to	1	to	1	1	1	1	learn	to	1	English	1	1	11	69
計	6	8	5	1	6	1	7	2	8	7	0	0	7	0	8	5	71	
率	75	100	63	13	75	13	88	25	100	88	0	0	88	0	100	63		55

表15. クローズテスト I～IV成績

氏 名	正答率					順 位
	I	II	III	IV	平均	
A	33	37	48	38	39	(11)
B	28	37	61	56	46	(10)
C	78	58	—	—	68	(3)
D	67	58	70	63	64	(5)
E	67	32	52	59	51	(8)
F	83	68	83	69	76	(2)
G	88	79	—	—	84	(1)
H	50	47	—	—	49	(9)
I	67	32	78	69	58	(6)
J	72	—	52	44	56	(8)
K	83	63	57	69	67	(4)
平均	65	51	63	55	59	

(—は欠席を示す)

問題ⅡにおいてJ、問題Ⅲ、ⅣにおいてC、G、Hが欠席した。I～Ⅳの平均正答率と順位を表15に示した。正答率は平均59%であった。

IV. 考 察

1. グループに対する指導の効果

(1) ディクテーション

ディクテーションとヒアリングテストの2種のテストのうち、ディクテーションについては①および②において指導前と指導後の平均点に有意差があり、指導の効果があったとみなすことができる。

これに対し③においては、指導前より指導後の平均点のほうが高くなり、この差は有意であった。指導後のほうが成績が悪かったことになるが、これは行われた指導以外の要因が働いたためと考えられる。すなわち指導前の測定が測定材料を教材とした授業を行った日の翌日に行われたため、内容の理解と記憶が読話の助けになったのではないかと思われる。平均得点率も61.3%と高く、85語のうち83語(98%)書けた被験者がF、J、Kの3名いた。新出単語が多数あり構文も単純ではない材料だったことを考えると、前日の学習が翌日の測定に及ぼす影響がかなり大きかったとみなすことができる。

ディクテーション③の指導後の測定は、材料とした文章を試験範囲に含めた期末試験の直後に行ったので、指導前の測定と同程度の成績が出ることを予想したが、予想をはるかに下回る結果であった。教材としての学習から1ヵ月を経過していたために、学習の翌日ほど記憶に頼ることができなかったことを示している。しかしながら得点率は44.4%を示しており、①の指導後の得点率より高い。③は材料の難易度では①や②を上回っているが、既習の材料であったことが、読話の助けになったことを示している。

(2) ヒアリングテスト

ヒアリングテストの①および③においては、指導後の平均点は指導前の平均点より有意に高かった。②においては、指導前から指導後の平均点の伸び率は11.9%で、この差はt-検定の結果では有意ではなかった。しかしながら3つのテストの指導前の合計平均点と指導後の合計平均点については指導後のほうが有意に高いので、読話能力を高めることを目的とした指導が、ヒアリングテスト全体の得点を高めるのに有効であったと判断することができる。

(3) ディクテーションとヒアリングテスト

ディクテーション3題、ヒアリングテスト3種類の中で、ディクテーション③だけが、既知の材料であったという点で異質であり、また、この材料でのみ結果が反対になった。以上の結果から特別な材料や条件であったディクテーションの③を除けば、ビデオテープを用いた単音の指導、最小対語の弁別、クローズテストという手順を踏んで読話の訓練をしたことが、聴解の筆記問題として入学試験や検定試験でよく用いられるディクテーションおよび英検形式のヒアリングテスト（多肢選択法の問題）について、グループ全体に対して有効に働いたと言える。

2. 個々の生徒に対する指導の効果

(1)指導前後の変化

——ディクテーションとヒアリングテストの結果から ——

グループ全体に対しては、指導の効果があったと判断したが、個人に目を向けると、その効果は一様ではない。

ディクテーション③を除く5種のテストについて、指導後の成績が指導前の成績より高い場合○、ない場合を△、低くなった場合を×とし、さらに○を2点、△を1点、×を0点として点数化し、5種のテストの合計点を算出して総合評価点とし、9点以上を効果大(◎)、8点または7点を効果あり(○)、6点または5点を効果小(△)、4点以下を効果なし(×)として総合評価としたこれらの結果を表16に示した。効果がなかった生徒としてA、少なかった生徒としてD、J、効果の大きかった生徒としてG、H、I、Kがあげられる。

表16. 個人別指導効果

氏 名	ディ ク ション ①	ディ ク ション ②	ヒ リ ン グ ス ト ①	ヒ リ ン グ ス ト ②	ヒ リ ン グ ス ト ③	総 合 評 価 点	総 合 評 価
A	×	×	○	×	○	4	×
B	○	×	○	△	○	7	○
C	○	○	○	×	○	8	○
D	×	○	○	×	○	6	△
E	○	○	×	○	○	8	○
F	○	○	△	○	△	8	○
G	○	○	○	△	○	9	◎
H	○	○	○	△	○	9	◎
I	○	○	○	○	○	10	◎
J	×	○	○	△	△	6	△
K	○	○	△	○	○	9	◎

指導の効果と他の要因との関連を調べるために、ディクテーションとヒアリングの指導前の順位と指導後の順位および差の大きさの順位と、基礎資料の中の基礎言語力、読書力偏差値、英語の成績の順位の3項目との相関を調べた。

ディクテーションとヒアリングの順位は表4および表5に示したが、同順位のものがある場合は、平均順位に改めた。基礎言語力、読書力偏差値は表2に示した成績の順位である。同順位のものがある場合は、平均順位に改めた。

英語テストには、表1の英語定期試験と英語A、B合計3種のテストの点を合計してその順位を示した。3種のテストの合計点で個々の生徒の英語力を説明し尽くすことはできないが、合計得点の順位は、筆者の実感に近い結果になっている。

相関を調べた結果を表17に示す。

表17. 成績およびその前後差の順位と、他の要因の順位との相関

氏 名	順位								
	ディクテーション			ヒアリングテスト			基礎 言語力	読 書 力	英 語 力
	指導 前	指導 後	前後 差	指導 前	指導 後	前後 差			
A	11	11	11	2	9	11	9	9	5
B	7.5	8	3	6	6	8.5	6	6.5	6
C	2	2	9	3.5	3	4	2	1	9
D	9	10	10	3.5	9	10	10	10.5	3
E	5	6	7.5	9.5	9	6.5	11	10.5	11
F	7.5	7	2	5	2	1	2	2	1
G	1	1	5	1	1	4	8	6.5	2
H	3.5	4	6	7	6	6.5	2	5	4
I	10	5	1	9.5	6	4	5	3	7
J	6	9	7.5	9.5	11	8.5	7	4	10
K	3.5	3	4	9.5	4	2	4	8	8
基礎	0.31	0.47*	0.48*	-0.07	0.60*	0.64*	相 関 係 数		
読書	0.21	0.37	0.43*	-0.02	0.48*	0.55*			
英語	-0.13	-0.05	0.17	0.65*	0.47*	0.19			

ディクテーションの指導前の成績は、基礎言語力、読書力、英語力のどの項目とも相関がほとんどないが、指導後の成績は基礎言語力との相関がみられ ($r=0.47$)、指導前と指導後の差には、基礎言語力と読書力の両方の相関がみられた (基礎言語力 $r=0.48$ 、読書力 $r=0.43$)。英語力とはいずれもほとんど相関がなかった。

このことは、ディクテーションの成績や指導による伸びの順位には、英語力の順位はほとんど関係していないこと。指導を受けた結果、基礎言語力と読書力の高い者に対して指導の効果が大きく働き、結果として基礎言語力の高い者が上位になる傾向があったことを示している。

一方、ヒアリングテストには、指導前の成績には英語力との相関がかなりみられた ($r=0.65$)。指導後の成績には基礎言語力、読書力、英語力のいずれとも相関がみられたが (基礎言語力 $r=0.60$ 、読書力 $r=0.48$ 、英語力 $r=0.47$)、基礎言語力との相関が一番高かった。差の大きさには基礎言語力および読書力との相関がみられ (基礎言語力 $r=0.64$ 、読書力 $r=0.55$)、英語力との相関がほとんどなかった ($r=0.19$)。

このことはヒアリングテストの成績は、指導前も指導後も英語力とかなり関係があること。指導を受けた結果、基礎言語力と読書力の高い者に対して指導の効果が大きく働き、その結果、指導後の成績は、基礎言語力の高い者、読書力の高い者、英語力の高い者が上位になる傾向があったことを示している。

ディクテーションおよびヒアリングテストと他の要因との相関を調べた結果を総合すると、本研究で用いた英語の聴解問題の理解を目的とした指導は、日本語の言語力の高い者に対しては効果が大きかったが、低い者に対しては小さかったと判断できる。

指導効果の個人表 (表16) と基礎言語力ならびに読書力偏差値を比べ

て見ると、総合評価で×のついた生徒Aと△のついたDとJのうち、AとDは、基礎言語力、読書力ともに低く、Jは基礎言語力が低いので、相関係数をもとに判断した「日本語の言語力の低い者には指導の効果が小さい」傾向と一致していることがわかる。

総合評価で◎のついたG、H、I、KのうちHとIは基礎言語力、読書力ともに高く、Kは基礎言語力が高いので、この3人は相関係数をもとに判断した「日本語の言語力の高い者には指導の効果が大きい」傾向と一致していることがわかる。しかしながらGは基礎言語力は低く、読書力偏差値も高くないので、相関係数をもとに判断した傾向とは一致しない。

Gはディクテーションの指導前、指導後、ヒアリングテストの指導前、指導後のすべてのテストで1位である。英語力は2位であるが、中学レベルのテストA、Bでは1位のFと同じ得点である。また、Gは高等部に入学してまもなく他に先んじて英検の3級に合格している。このことは高校入学の時点で、中学レベルの英語を十分身につけていたことを意味する。Gが日本語の言語力が高くないにもかかわらず指導の効果が大きくかつ成績が良かった原因は、英語力そのものが高く、テストに用いられた材料を十分理解する学力があったためであろうと思われる。

ヒアリングテストの成績順には、指導前も指導後も英語力との相関がみられるが、ディクテーションの成績順には指導前も指導後も英語力との相関がほとんどみられなかった。このことの原因としてヒアリングテストが被験者にとってなじみのある形式であるのに対し、ディクテーションが初めてのテスト形式であったので、慣れなくて力を発揮できなかったこと。ディクテーションには英語力とは別の要因が強く関係していることの二つが考えられる。

個々の生徒における指導前と指導後の変化から、指導効果の大小は日本語の言語力と関わりが大きく、言語力の高い者において大きく、低い者において小さい傾向が見られが、英語力が十分高い場合には、言語力が高くなくても効果が大きいことがわかった。また、ディクテーションにおける成績は、英語力を反映しているとは言えないので、聴覚障害者に対し英語力を測定する意味でディクテーションを課するのは無意味であるといえる。

(2)指導中の変化

——最小対語とクローズテストの結果から ——

指導効果の違いが生じる過程について知るために、指導の途中で測定した最小対語とクローズテストの結果について考察する。

最小対語の段階で平均点(16.9)より成績の低かった被験者は、AとIである。ディクテーションおよびヒアリングにおいて指導効果がなかったとみなされた生徒Aは単音の弁別の段階ですでに他の生徒と差が生じている。一方、生徒Iは単音の弁別の段階では他の生徒とかなり差があり、低いが、ディクテーション、ヒアリングテストともに指導効果が見られ、指導効果が大きかった4人の中の1人になった。順位も指導後はディクテーション、ヒアリングともに5番目の成績になっている。

19点すなわち79%弁別できたD、G、HのうちDは、単音の弁別段階では得点が高いが、ディクテーション、ヒアリングテストの結果では指導効果が少なく、順位も指導前より指導後が下がっている。

Gは、ヒアリングテストの指導前の③を除くと、どのテストにおいても常に最高点を出した。Hはディクテーションでは指導効果がやや少なかったが、ヒアリングテストでは指導効果があった。

まとめると、最小対語弁別による指導の過程で、弁別の成績が悪かった被験者の中には、ディクテーションとヒアリングにおいて、指導効果の大きかった者となかった者がおり、弁別の成績の良かった被験者の中にも、指導効果の大きかった者と少なかった者がいることになる。すなわち単音の弁別の成績には、ディクテーションやヒアリングの成績に現れた指導効果と直接関連がみられない。

次にクローズテストでは、4題すべて受けた生徒の中で、A、B、Eの3名が平均より少ない得点を示している。最小対語ですでに正答率の低かったAの得点が最も低く、答えに空欄が多かった。ディクテーションとヒアリングテストにおいて指導の効果がなかったとされた生徒Aは単語の読み取りの段階から他の生徒に遅れをとっており、クローズテストにおいても最下位の成績であった。この生徒は英語の読話が非常に不得意な生徒とみなすことができる。

Iは最小対語での得点が低かったにもかかわらずクローズテストでは平均値に近い正答率を示した。

また、Dは最小対語においては最も成績のよかった3人のうちの一人であり、クローズテストにおいても平均を上回って得点した。しかしながらディクテーションとヒアリングテストでは指導の効果は少なく、指導前、指導後の順位も低かった。

生徒の順位の変動を、表18にまとめた。なお、同順位が複数いるときには、平均順位に直して（ ）内に示した。さらに図11にグラフで示した。

表18. 成績順位の変化

氏 名	指導前		指導中		指導後	
	ディク テーション	ヒアリング テスト	最小 対語	クローズ テスト	ディク テーション	ヒアリング テスト
A	11	2	10	11	11	8 (9)
B	7(7.5)	6	5 (7)	10	8	5 (6)
C	2	3(3.5)	5 (7)	3	2	3
D	9	3(3.5)	1 (2)	5	10	8 (9)
E	5	8(9.5)	5 (7)	8	6	8 (9)
F	7(7.5)	5	5 (7)	2	7	2
G	1	1	1 (2)	1	1	1
H	3(3.5)	7	1 (2)	9	4	5 (6)
I	10	8(9.5)	11	6	5	5 (6)
J	6	8(9.5)	5 (7)	8	9	11
K	3(3.5)	8(9.5)	4	4	3	4

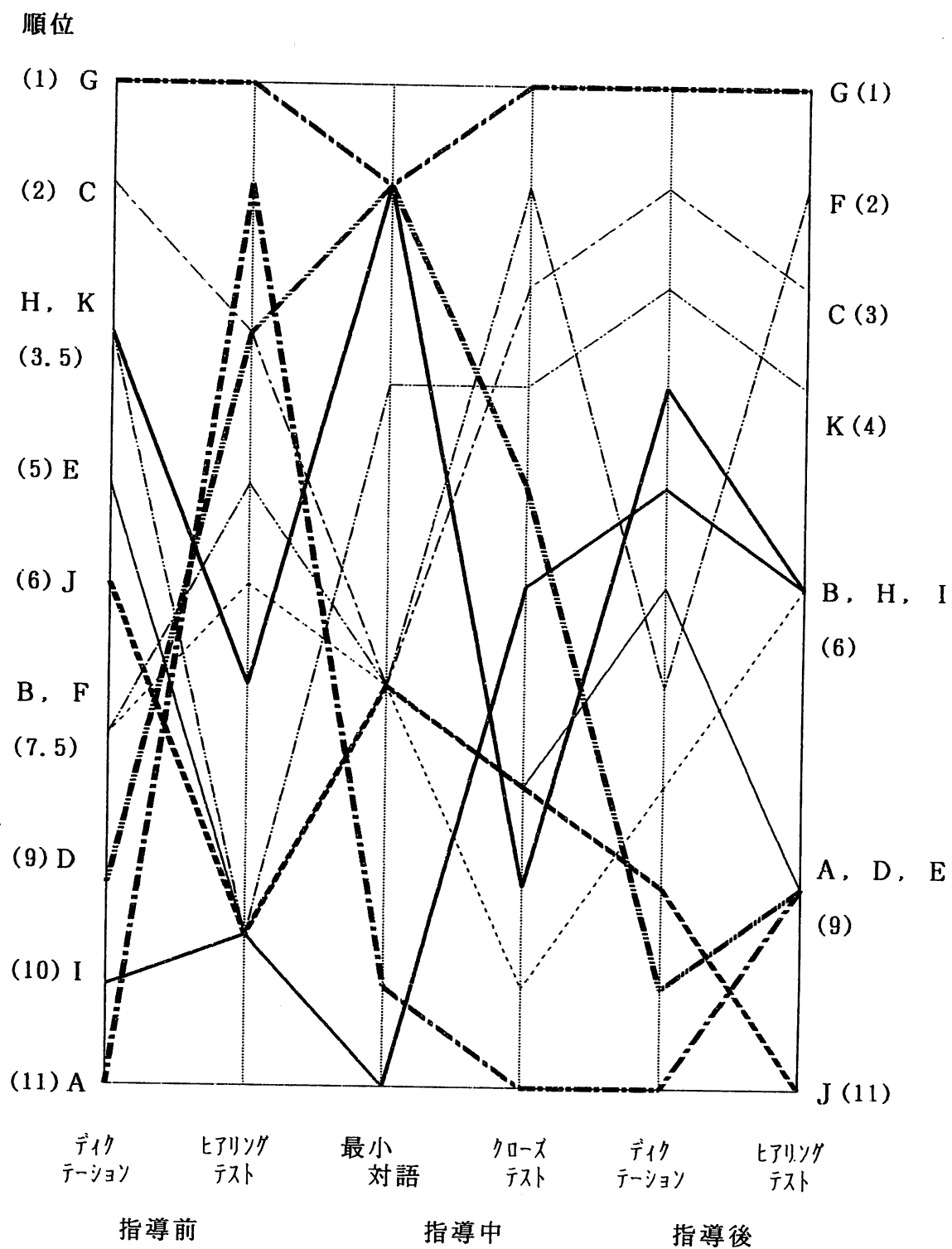


図11. 成績順位の変化

グラフから一見してわかることは、指導前のディクテーションからクローズテストまでは順位の入れ替わりが激しく、グラフの線が錯綜しているが、クローズテストから指導後のヒアリングまでは、順位の入れ替わりが少なくなっていることである。このことはクローズテスト、ディクテーション、ヒアリングの3種のテストが測定している能力に共通の部分があることと、その能力が指導によって指導前よりはっきりと反映されるようになったことを示している。

最後に行われたヒアリングテストの成績順位は、常に1番だったGを除くと、2番から7番までのF、C、K、B、H、Iは基礎言語力が高く、8番から11番のJ、A、D、Eは基礎言語力が低いという特徴がみられる。ディクテーションとヒアリングテストの結果と、他の要因との相関を調べた結果から、聴解力の成績と指導の効果には、英語力よりも、母語の日本語力と関わりがあることが推定された。

Oller 他(1974:245-252)は英語を母語としない対象に対し、英検のヒアリングテストと形式のよく似たTOEFL のリスニングテストと、クローズテストとディクテーションを行った。その結果、これらには総合的な作業が要求され、学習者の基底の言語能力、すなわち内在化された予測文法力を映し出すという共通性があると主張した。それゆえTOEFL の項目の中ではリスニングが英語の全般的な能力を最もよく測定する手段である、と結論している。

本研究においては、リスニングテストとクローズテストとディクテーションには、共通性がみられるという点でOller の主張を裏付ける結果になる。しかしながらその共通性は英語力ではなく日本語の言語力であった。母語の言語力に発達遅滞のみられる聴覚障害者にとっては、読話

による聴解問題は、そこに反映される「学習者の基底の言語能力」が、学習の目的とする外国語の習熟度よりも母語の言語能力を意味していることになり、外国語の能力を測定するテストとしてはふさわしくないとはいえる。

指導中の最小対語の成績は指導後のディクテーションおよびヒアリングテストの成績との関連がなく、クローズテストの成績にはディクテーションおよびヒアリングテストとの関連がみられた。このことから、クローズテストの段階での指導がディクテーションとヒアリングテストの成績の上昇に効果的であったと考えられる。しかしながら最小対語の指導をせずにクローズテストをした場合にも有効であるかどうかは本研究からは確かめられない。

3. 出題による難易

読話による英語の聴解問題の成績には、言語力が関係していることが推定されたが、どのような問題がわかりやすく、どのような問題がわかりにくいのかを更に調べることによって、その理由を考察する。

(1) ディクテーション

題材に用いた①と②は共に中学生が習得している程度の文であるが、成績には差があり、被験者の平均解答率は①は指導前に21.2%、指導後に30.3%の成績だったが、②は指導前に46.3%、指導後に55.9%であった。

①の成績がおとる理由は、ディクテーションが初めてのテスト形式で要領がつかめなかったこと、文中にairport, bath, bathroom, bathtub等のなじみのない単語が含まれていたこと、アメリカと日本の入浴習慣の違いを予備知識として知らなかったので、話を予測しながら読話することがしにくかったことが考えられる。

②は、易しい単語で構成されており、内容が日本の学校生活のことなので、予測しながら読話することがしやすかったはずである。数字や曜日等もかなり書けた。目立った間違いとしては、classes, Saturdays, subjects等の複数形が書けなかったこと。liveとleaveの混同があったくらいである。

③は語彙、内容、構文ともに①、②と比べると格段に難しい材料であるが、事前に学習していたため、成績が良かった。とくに指導前の測定は正答率が61.3%に達した。このことは学習の翌日に行うディクテーションは、聴覚障害者でもかなりの成績をあげることができることを示している。通常のディクテーションには予測と記憶が重要な役割を果たすとされている(加瀬, 1972)が、読話によるディクテーションの場合は通

常を上回る予測が必要であり、記憶が予測を助けたといえる。しかしながら指導後の測定ではほとんどの被験者の成績が下がり、正答率は61.3%から44.4%に下降した。つまり約3割減少したことになる。これは短期的な記憶が長期的な記憶に完全には結びつかなかったことを示している。

しかしながら44.4%という正答率は①の指導後よりも良い成績である。題材の難しさからすれば、既知の材料であったことがかなり読話の助けになって良い成績に結びついたと考えられる。普段の学習の中でディクテーションを行うことは学習内容の定着につながり、学力の増進に結びつく可能性が示唆された。

以上のことからディクテーションの難易は、題材そのものの語彙や文法構造等の難易の他に、内容についての予備知識の有無や、題材が既知のものであるか未知のものであるかが係わっていると言える。

(2) ヒアリングテスト

ヒアリングテストにおいては、問題により正答率がかなり異なる。松藤（1991）の研究によれば、ヒアリングテストの中で聴覚障害者にとって難しい問題は、(a)問題文に出てくる語句がそのまま正答とならない問題、(b)質問の対象が予測できない問題、(c)数字を扱う問題、(d)人物関係が複雑な問題などであった。これらの難しさは聴覚障害者特有のものとは言えず、健聴者にも共通している。

本研究で用いたヒアリングテスト①と②の中の正答率の低い問題のいくつかは、先行研究の(a)と(b)に該当する問題である。例えば、正答率の一番低かった①の3では、「メアリーはたいてい毎週土曜日に街へ買物に行く。彼女はたいてい毎週何度買物にでかけるか。」という質問に

「1. 一度 2. しばしば 3. 土曜日に 4. 毎週」の中から答えを選ばなければならない。正答率の低かった①の6、②の6にこの共通点がみられる。②の6にはこの他、友達と待ち合わせてコンサートに出掛けるという経験がないことが内容の理解を妨げていると考えられる。

正答率の低かった②の1は先行研究にあげられた問題に該当しない。この問題が難しかった理由として、質問が間接疑問文になっていることと、そのために文中にあるwho が読話しにくかったことが考えられる。

正答率の高い問題には、先行研究の(a)にあるように答えが情報提供文に直接的に表現されていること、生活経験上知っていて内容を把握しやすいこと等の共通点がみられる。例えば②の8では答えのhospitalが情報提供文の中に直接的に表現されている。また、見舞いに花を買うことを生活経験の上で知っていて内容が把握しやすかったこと等が考えられる。①の2も同様の理由でやさしかったと思われる。

②の5は数字を扱う問題であるが、先行研究の(c)とは逆に正答率が高かった。これは足し算を1回すれば答えられる問題で、複雑な操作がいらなかったためと考えられる。また、②の7は人間関係を問う問題であるが、これも先行研究の(d)とは逆に正答率が高かった。これは登場人物が3人で、sisterという語が文中に直接的に表現されているので、正答しやすかったと思われる。

ヒアリングの①と②から、答えが情報提供文の中に直接的に表現されていない問題は、正答しにくく、直接的に含まれていれば、正答しやすいという先行研究を裏付ける結果になった。また、数字を含む問題や、人間関係を問う問題がすべて難しいのではなく、単純なものは正答しやすいことがわかった。

質問文の読話自体が困難であるために正答率が低かったと推定される

問題もあった。

ヒアリングの③は、健聴者と聴覚障害者の成績を比較するために、英検を受験した全受験者の成績をもとに、あらかじめ難易度を予測して作問した。易しいとされる問題に対する全受験生の正答率は70%以上、難しいとされる問題に対する正答率は29%以下、中位はその間である。

被験者にとって1番の難問は6であった。この問題は先行研究の(a)に述べられたように、質問の答えが情報提供文の中に直接的に表現されておらず、「金を持っていないことがわかった。」という情報から「切手を買えなかった。」という答えを出さなければならないことが難しさの原因になっている。これは健聴者にとっても同様であろう。

次に難しかったのは、10である。この問題は、答えが直接的に情報提供文の中に入っているにもかかわらず、被験者の正答率は低かった。健聴者にとっては中位の難易度の問題である。被験者の成績が良くなかった理由は二つ考えられる。ひとつはI'm afraidという表現に慣れていなかったこと。もうひとつは質問文のcan't がcan と区別しにくかったことである。can とcan't の弁別は読話では難しい。ここに健聴者との差が出てくるのではないかと思われる。指導前は正答者がなかったが、指導後には3人が正答しているのは、指導の中で特に取り出して扱った効果があったためと思われる。

正答率の高かった2と8は、健聴者にも易しい問題であった。2は、質問と答えが非常に直接的である。8はshoppingをする場所としてdepartmentstore を答えなければならないが、デパートでの買物は経験していることなので正答しやすかったと思われる。

ヒアリングテスト③において健聴者と聴覚障害者による同じ問題に対する正答率からみた問題の難易には、似た傾向が見られるが、全く一致

しているとは言えない。一致しない理由は、聴覚障害者には問題文の難易の他に言語力、読話の難易、経験の有無などの要因が係わってくるからである。

被験者の指導後の正答率と全受験生の正答率を比較してみると、被験者の正答率のほうが高かった問題が問題 3、5、11、12 の 4 題、被験者の正答率のほうが低かった問題が問題 6、7、9、10 の 4 題である。したがって、本研究の被験者は、指導後の成績において、英検 3 級および 4 級の受験者（合格者と不合格者を含む）の平均程度の成績をおさめることができたことになる。

3 級より 4 級の問題が易しいこと、問題の難易が合格者だけでなく不合格者の成績も含めて判断されていることから、被験者の成績は指導により伸びたが、指導後においても 3 級レベル以下にとどまっているといえる。

被験者の大部分がおよそ 1 年前に英検 3 級に合格していることを考えると、ヒアリングテストにおいては指導後も英語の総合力相応の成績をあげるようになったとはいえない。すなわち、今回の指導を受けても筆記試験で同等の学力を持つ健聴者と同程度の成績をおさめるには到っていないといえる。

V. 結論

聾学校高等部に在籍する 1 グループの生徒11名に対し、1 ヶ月間英語の読話の指導を行って指導前と指導後の成績を比較することにより、指導の有効性を調べた。

指導の手順は、①単音の読み取り ②単語の読み取り ③文中の単語の読み取りである。

①には、通常の英語指導で用いることを目的として製作された市販の発音練習用のビデオテープを教材として用いた。②は最小対語の弁別問題を用い、指導しながら指導中の測定も行った。③はクローズテストを用いて予測力の強化を図り、指導中の測定も行った。

指導前・指導後の成績の比較には、ディクテーションとヒアリングテストをそれぞれ 3 種類用いた。

その結果、グループ全体に対しては指導の効果があつたと見ることができた。しかしながら指導効果には個人差が見られ、言語力の低い生徒に対しては、本研究で用いた指導法の効果は少なく、結果として、指導後の成績には英語力よりもむしろ日本語の言語力が反映された。特にディクテーションにはこの傾向が強くみられた。また、本研究で用いた指導法および測定方法では、成績の伸びは示されたものの、同等の英語の学力を持つとみられる健聴者と同程度の成績を挙げるところまでは到達できなかった。

本研究から、聴覚に障害があっても読話によって英語の聴解問題を理解できるように指導することは可能であることがわかった。しかしながら指導効果には個人差があり、言語力の低い者に対する指導法の開発が課題となった。

聴覚障害者が英語の聴解問題の試験を受ける場合には、音声に口形を伴う形で出題が行われればある程度理解できる可能性が示された。しかしながらその成績は、筆記試験で同等の成績をおさめられると思われる健聴者の成績には及ばず、また英語力を如実に反映するものでもない。したがってその結果をそのまま健聴者と同等に評価されるのであれば、聴覚障害者にとって不利であることは否めない。

今後の課題として：

- (1)言語力の低い生徒に対する指導法の開発
 - (2)どんな指導法が有効かについての研究
 - (3)聴解問題を読話以外の視覚的提示方法（例えば手話）を使って理解させることについての研究
- が必要である。

本稿を終えるにあたり、快く、且つ辛抱強く実験に協力下さった筑波大学附属聾学校高等部3年英語Ⅰ組の皆さんに、心より感謝申し上げます。

また終始ご指導頂きました中野善達先生、ならびに斎藤佐和先生をはじめ、筑波大学教育研究科リハビリテーションコースの諸先生がたに深く謝意を表します。

1993年1月26日

松 藤 み ど り

- (1) 青木昭六(1985): 英語の評価論. 大修館書店.
- (2) アルク (1982): これでは通用しない高校生の実力. 英語教師読本別冊. The English Journal, 19-21.
- (3) Berger, K.W. (1970): Vowel confusions in speechreading, Ohio Journal of Speech and Hearing Research 5(2). 123-128.
- (4) Carrol, John B. (1964): Language and Thought. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc.
- (5) Carrol, John B. (1972): 英語の評価と教授. 大修館書店.
- (6) 聴覚障害編集部(1991): 聾学校在籍生徒数の変化. 聴覚障害448, 21-22.
- (7) Educational Testing Service (1989) Test of English as a Foreign language(TOEFL). Princeton, NJ.
- (8) Erber, N.P. (1972): Auditory, visual and auditory-visual recognition of consonants by children with normal and impaired hearing. Journal of Speech and Hearing Research. 15:413-422.
- (9) Gimson, A.C. (1970): An Introduction to the Pronunciation of English. Edward Arnold.
- (10) 平木修一(1991)インテグレーションのありかたに関するレポート(経験者から) 聴覚障害488, 21-22.
- (11) Horibe, Norio and Satoshi Furuhashi (1974): Hierarchy of Aural Perception Difficulties at Several Levels of English Teaching. JACET Bulletin, No.5 87-106.
- (12) Hymes, D.H. (1971): On Communicative Competence. Pride J.B. & J. Holmes (eds.) Sociolinguistics, Harmondsworth.
- (13) Jeffers & Barley (1971): Speechreading (Lipreading). Charles C. Thomas.
- (14) 垣田直巳 (1979): 英語教育学研究ハンドブック. 大修館書店.

- (15)加瀬正二郎 (1972):ディクテーションについての一考察. 中部地区
英語教育学会研究紀要.No.2 33-37.
- (16)小島蓉子 (1990) 障害者福祉概論. 建帛社.
- (17)Ladefoged, Peter (1975): A Course in Phonetics. New York.
Harcourt Brace Jovanovich, Inc.
- (18)Lado, Robert (1950): Test of Aural Perception for Japanese
Students: Ann Arbor. The University of Michigan Press.
- (19)LoMaglio, Larry J. (1991): Using the TOEFL to Measure the
Reading Proficiency Levels of Deaf College Applicants. AAD
Vol.136, No.3 261-264.
- (20)根間弘海 (1987):英語の発音演習. 大修館書店.
- (21)Massaro, Dominic W. (1987): Speech Perception by Ear and Eye.
Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- (22)松藤みどり (1991): 英検3級受験者の傾向と対策 ——本校高等部
における成績上位群の英語力の分析. 筑波大学附属聾学校紀要第
13巻.65-74.
- (23)三宅川正、増山節夫 (1986):英語音声学. 英宝社.
- (24)Mogfold, Kay (1987): Lip-reading in the Prelingually Deaf.
Hearing by Eye: The Psychology of Lipreading. (eds.
Barbara Dodd & Ruth Cambell), Lawrence Erlbaum Associates
Ltd.
- (25)文部省 (1989):高等学校学習指導要領.
- (26)文部省 (1992):特殊教育教育諸学校学習指導要領解説 ——聾学校編
— 393-399.
- (27)日本英語検定協会(1989-91) : 英検一次試験成績概況.
- (28)日本英語教育協会編(1991) : 実用英語技能検定3級全問題集.
- (29)旺文社(1991) : 平成5年度入試科目&配点一覧
- (30)Oka, Hideo (1981): Decording Strategies in Listening
Comprehension. 言語科学. 九州大学教養学部言語研究会.No.16,
6-28.

- (31) Oller, John W. Jr. (1973): Cloze Test of Second Language Proficiency and What They Measure. *Language Learning*. The University of Michigan. 23, 1, Jun., 105-118.
- (32) Oller, John W. Jr., P. Irvin and P. Atai (1974): Cloze, Dictation, and the Test of English as a Foreign Language. *Language Learning*. The University of Michigan. 24, 2, Dec., 245-252.
- (33) 大谷泰照 (1976): 国際的に見た日本人学生の英語学力. *英語教育*. 大修館書店. 25, 3, 6 月号, 14-17.
- (34) 酒井志延 (1991): 英語のオーラルコミュニケーション能力を測定するテストの開発. *STEP BULLETIN*. 日本英語検定協会. Vol. 3, 59-71.
- (35) 佐野ふみこ (1984): 聾学校生徒の英語学習上の特徴. 筑波大学附属聾学校紀要第 6 巻. 49-51.
- (36) 清水裕子 (1989): 英語筆記試験とクローズテストに見られる相関に関する研究. *STEP BULLETIN*. 日本英語検定協会. Vol. 1, 103-116.
- (37) Spolsky, Bernard (1971): Reduced Redundancy as a Language Testing. Perren, George E. and J. Trim (eds.) 383-390.
- (38) Spolsky, et al. (1968): Preliminary Studies in the Development of Techniques for Testing Overall Second Language Proficiency. *Language Learning*. The University of Michigan. Special Issue.
- (39) 竹蓋幸生 (1982): 日本人英語の科学 — その現状と明日への展望. 研究社.
- (40) 竹蓋幸生 (1984): ヒアリングの行動科学 — 実践的指導と評価への道標. 研究社.
- (41) Taylor, W. L. (1953): Cloze Procedure. A New Tool for Measuring Readability. *Jurnalism Quarterly*, 30, 415-433.
- (42) テクノエイド協会 (1988): 体の不自由な人びとの福祉.

- (43) 寺田正義 (1992): ディクテーションで測定できること. 英語音声学と英語教育. 開隆堂.
- (44) 寺内正典他 (1989): 「聴くこと」の能力の伸張が「読むこと」の能力の伸張に及ぼす転移に関する研究. STEP BULLETIN. 日本英語検定協会. Vol 1, 12-27.
- (45) 月山みねこ (1971): 聞き取りの障害と英文法 ——ディクテーションとヒアリングテストの分析. Language Laboratory. 語学ラボラトリー学会, 10, 15-28.
- (46) Uematsu, Satoru (1992): A Study of the Relationship between Listening Comprehension and Intelligence. 筑波大学教育研究科修士論文.
- (47) 山内絢子 (1984): 聴覚障害生徒の「英語」における語彙文法能力について. 筑波大学教育研究科修士論文.
- (48) Yosida, Kazue (1971) Text Dictation and Error Analysis of Japanese College Students. Bulletin of Fukuoka University of Education, 20, 2, Feb., 189-202.
- (49) Yosida, Kazue (1973) On Listening Comprehension for Entrance Examination to University. KASELE Bulletin, No.2, 34-43.
- (50) 吉田一衛 (1984): 英語のリスニング. 大修館書店.